

銀毛に眠る 一狐と猟
師、人と獣の物語一

下之森茂

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「ヘアラズ」の神々の元へ。」

赤髪の若き男は死にゆくシカの魂に、
神々へ導きの祝詞を上げる。

男は森林に棲む獣を狩り、
肉とする猟師・ヨエル。

禁猟区の深き森、〈禁域〉で
珍しい銀毛のキツネに会う。

——はらへったのう。

空腹を訴えるキツネが人の言葉を話すので、男は折れて餌付けしてしまう。

——犬ころと一緒にするでない！

猟師は剥いだ皮を売る為、町へ降りると、そこで美しい金髪の娘・キルスと出会った。

狐と猟師、人と獣の物語。

ノベルアップ+他にて重複掲載。

<https://shimonomori.art.blog/2020/05/0>
[l/ginmou/](https://ginmou/)

※本作は横書き基準です。

1行23文字程度で改行しています。

目次

01	獣を屠る	1
02	禁猟区の食客	12
03	足枷の道	38
04	蛇と神々と魂の行き先	47
05	商人と猟師	65
06	別れた枝	82
07	騒がしい夜の村	92
08	なめしとにかわ	115
09	折られた枝	135
10	名の無い獣たち	163
11	臆病な迷い子	187
12	ふたつの境界	199

0 1 獣を屠る

それが男に顔を向けた。

つぶらな目に命を灯し、

長細い前の足で地面を踏みつけ

その苛立ちをあらわにする。

濃い土色の体毛に覆われ、

四脚であつても長いツノは

杖状に別れて先が尖っている。

頭を小さく左右に振って、

大きなツノで男を威嚇する。

伸びたツノはその動物の年齢を伺わせる。

4才を過ぎた牡鹿。

冬を迎える前の繁殖期。

「前足で良かった。」

男はそのシカに言うでもなく、

小さく安堵し、ひとりごちた。

シカは前足を片方だけ縄で縛られ、樹の周囲は土が剥き出しになり

抜け出すべく一晩暴れた形跡がある。

男の姿に逃げようとすも、

隣の太い樹を中心に四肢を滑らせた。

罨にくくられた前足が、

シカを捉え離さない。

男の小さな身体を包むほど

大きなオスイノシシの皮を背に、

腰には獣を屠る山刀ほぶをぶら下げる。

暗い土色をした

イノシシの頭の毛皮を脱ぐと、

短く燃えるような赤い髪が現れる。

赤土色の肌をした顔には

あどけなさを残していた。

罨を仕掛けた男は、獣の敵である。

男はじわりとシカとの距離を詰める。

シカの立派なツノをまともに食えば、

小さな人の男などひとたまりもない。

シカと向き合った時に

母の腕で眠る弟を思い出して、

男はつばを飲み込んだ。

野生動物は、

生きる為に死力を尽くす。

生半可に向き合えば、

狩る側が命を失う。

輪にした縄を持って、男がさらに近寄る。

シカもその時を待っていたのか、

長いツノを向けて男を突いた。

だがシカは再び畏に自由を奪われ

前足から勢いよく姿勢を崩し、

後ろ足を滑らせると

無防備な背中を男に向けた。

その瞬間を狙い、男はシカに横腹に膝で飛び乗り、輪にした縄でツノを縛り引つ張った。

罟を仕掛けた樹に、

ツノが地面を掘るほど低く頭を縛り付ける。

ツノごと横倒しのシカは、高い鳴き声を上げる。

男は体重を乗せて腹を押さえつけ、

暴れる後ろの両足も別の縄で縛った。

縛った縄を枝に投げて、シカの身体が

ほぼ逆さまになるまで引き上げる。

重労働と緊張で息が上がる。

山刀を鞘から抜く。

山刀は猟師に欠かせない

仕事道具のひとつである。

黒色の刃は手のひらほどの長さで、

刃の先端は鋭く尖らせ、手入れされている。

深く息を吐く。

刃をシカの首の根元にある

頸動脈に刺して手早く抜く。

刃の中腹までが血と脂で赤く濁る。

刺した場所から血が湧いた。

シカが痛みに鳴き、肺を動かせば、

血が2度、3度と塊になって湧いて出る。

身体に血を巡らせようと

心臓を動かせば動かすほど、

血は首の穴から抜け出て

地面を血まみれにした。

鳴き声は次第に弱まる。

シカの目は魂を失う。

(慣れはせんな。)

男は胸中でつぶやいて、

その目を見下ろし、再び深く息を吐く。

「へアラズ」の元へ。」

消えゆく命を眺め、

神への祈りを述べる。

生き物は人に限らず、

動物であれ植物であれ大地に縛られる。

だが、魂だけはその束縛から開放され、

〈アラズ〉の神々の元へ行けるという。

肉体から解き放たれた魂を導く祝詞のりとが、

男の中には習慣としてまだ残っていた。

刃についた血と脂をシカの足先で拭う。

シカの命を奪うだけであれば、

逆さ吊りにしてまで放血する必要はない。

男は肉を獲るのが目的である。

シカの体毛についた毒により傷口から

汚染された毒の血が血管に巡り、

残った熱によって肉全体の腐敗を早める。

「人も傷口を消毒せねば、

病気になる、魂が荒れる。

これと同じことが、

狩った動物の屠体とにも起こる。」

と、父は言った。

父の父である祖父も、

幼い頃の男に同じことを言った。

(どうして屠体とが失ったはずの魂とが荒れるのか?)

男にふと疑問が湧いたが

次の作業に移った時に、

それは記憶の隅へと追いやられた。

吊ったシカを降ろして、

魂を失った屠体とを仰向けにする。

秋になり脂肪を蓄えた大きな身体。

柔らかな腹の皮をつまみ

山刀で丸い穴を空けると、

薄い膜から膨れた内臓が

今にもあふれ出そうであった。

まずはヘソから肛門へ向けて下腹部を開ける。

尿道をつまみ、尿が肉にこぼれるのを防ぐ。

排泄物による肉の汚染を穢れと呼ぶ。

穢れを防ぐ為、肛門周りまで皮を切り、つまんだ長い尿道を外へ出す。

次は胸部に向けて腹の毛皮だけを切る。

毛皮の下は薄い腹膜により

内臓が包まれている。

腹膜を刃先で開けた穴に指を突っ込み、

指で作った隙間に刃先を入れて

内臓を傷つけないよう慎重に腹を開く。

糞が詰まった大腸を傷つければ肉は穢れる。

「クサイ肉は食いたく無いからな。」

男は鼻にしわを寄せて、少し昔を思い出した。

臭いや汚れは肉の味に直結するだけでなく、

腹痛などの病気を引き起こすこともある。

穢れはできる限り避けなければいけない。

内臓の半分を覆うほどの大きさの第一胃。

緑がかった灰色で、内部の空気で膨張している。

腹膜に刃を深く入れてしまうとその胃を傷つけ、

胃の内容物が腹腔の内外へ噴出、飛散する。
胸骨を開き、肋骨に繋がる横隔膜を切り離し、
胸から首へ、男は二の腕まで突っ込む。

気管と食道から繋がる内臓を
引きずり出して地面にこぼす。

暗い赤土色の肝、薄紅色の肺、
握りこぶし程度の心臓。

白色点、出血、変色などの異常は見られない。
心臓と肝は生で食えないこともない。

獲ったばかりの鮮度の良い内にだけ
食べられる部位は、猟師の特権とも言われた。

「食わんのか？」

そう言われてよく勧められたが、
幼かった頃の男には父たちが喜ぶ

その味の良さが分からなかった。

男は空腹ではなかった。

病気の危険性を考え、

他の部位と同じく埋めることにする。

虫たちに食われ土に還るか、

食肉の獣たちが掘り起こして食う。

男の村で食うものは決まって肉だった。

ただ、屠殺直後の肉は熱を持ち、

筋肉が硬くなる為に普通は食べない。

内臓はその生物が死んでも熱を持ち、

肉が傷むのを早める為に最初に処理する。

肝や野菜のような取れたての鮮度とは、

肉に限ってはその扱いが異なる。

最後は大腸と膀胱ぼうこうを傷つけないように、

筋から引き剥がすようにして取り出す。

男の腕は肘まで脂にまみれ、

シカの生きていた時の熱が伝わり、

ほのかに蒸気を放つ。

曲げ続けた腰を伸ばして、深く息を吸う。

全身に血がめぐるのが分かる。

獣を屠^{ほふ}り、肉を得る。

これが小さな赤髪の男の、
猟師としての生業であつた。

02 禁猟区の食客

刺すような視線に

男は背筋を凍せた。

赤い髪の毛から全身まで

毛穴が開いて一斉に汗が湧き出す。

野生の感が、警鐘を鳴らす。

得体のしれない恐怖を覚えた。

沢に浸けたシカの屠体を引き上げるため、

屈んだところを男は何かに狙われた。

(イノシシか、野犬：オオカミか。)

狩猟で命を落とす猟師は少なくない。

イノシシは突進して太い牙で相手を襲い、

野犬やオオカミは群れを作り獲物を狩る。

例え軽傷あっても、動物の持つ

特有の毒によって死ぬこともある。

すぐに首を上げて逃げるか、

腰の山刀を抜いて敵意を示して

威嚇し追い払わなくてはならない。

しかし、男は見えない恐怖に支配され、
身体が思い通りに動けなくなっていた。
そんなことは今までで一度も無かった。

(いや、〈禁域〉に近づき過ぎた…?)

猟を生業の男が拠点とする森林と、

猟師が入ってはならない深い森の禁獵区の

〈禁域〉には明確な境界がある。

(最悪 〈煤^{すす}まみれ〉か…。)

沢の上流へ視線だけを動かして、境界を見る。

均等に埋まった不自然な白色の柱が、

森林と〈禁域〉の境界。

その境界に近づけば人間は形を残したまま

真っ黒な〈煤まみれ〉の姿になって死ぬ、と

祖父より古くから伝えられていた。

だが男の視線の先に居たものは、

〈煤まみれ〉の死ではなく、

イノシシでもオオカミでもなかった。

(犬…いや、キツネか…?)

呆氣にとられると同時に、

猟師である男が目を疑ったのは

その体毛の色であった。

森林に棲むキツネの体毛は

金色か赤土色しか見かけない。

キツネの鼻面は黒色だが

体全体の毛は白っぽい灰色で、

それが〈禁域〉の木漏れ日によって

銀色に光り輝いていた。

月のように薄い金色をした目が、

男をずっと見ている。

キツネは境界の向こうで後ろ足を横に倒し、

座ってこちらを見ていた。

男の緊張は一瞬で緩み、大きく息を吐いた。

（動物なら〈禁域〉には入れるよな…。）

鳥や虫も境界を認知するわけではない。

〈禁域〉に入れないのは唯一、人だけだった。

男もまた例に漏れず、

猟師の教えを破ってまで

〈禁域〉に入る度胸は無かった。

また、〈アラズ〉の教えは自害を許していない。

「なんだ、おめえ…。」

小さな声で、訛り、呼びかけた。

遠く静かな〈禁域〉の中で、

動物の聴力で男の声は届いた。

キツネはピクリと耳をこちらに向ける。

——はらへったのう。

「そんなわけあるか。」

男は突然、自問自答し、声に出た。

男は自分の腹を見て、小首を傾げる。

男はやはり空腹ではなかった。

縛ったシカの足を手にし、沢から引き上げた。

何のことはなく、男は自由に動けた。

沢に一日浸けたシカの屠体は毛に水を吸い、

昨日内臓を落とす前よりも重く感じた。

放血し内臓を取り出した屠体を沢に漬けるのは、

泥汚れや血を洗い落とすだけではなく、

肉の熱を冷まして腐敗を抑え、

獣臭を薄める効果がある。

放血、内臓の処理、冷却。

この3つが肉質に大きく影響する。

(これでキツネを追っ払うか。)

シカを背負う為に持ってきた

木の棒を握って考えたが、

相手は〈禁域〉の境界向こうなので諦めた。

キツネもこちらを見て座るだけで、

立ち上がったって肉を奪うという気配さえ無い。

自分が一体何に怯えたのか、

男はすっかり忘れてしまった。

シカの股に木の棒を差し込み、

縛った足で屠体を吊る。

ぶら下がる首とツノが運搬の邪魔になったので、

ついでに棒に縛り付けることにした。

背負ってはみたものの、

食い込む棒が肩をえぐる痛みを与え

数歩と絶えきれなかった。

結局棒と腹の間に首を突っ込み、

シカの両足を掴んで背に担いで

イノシシの皮を濡らした。

「まだまだ一人前にならんな。」

父に何度も言われた言葉を、

男は口にして実感する。

成人してこれほど良いシカを、

男はひとりで獲ったことはなかった。喜びと同時に虚しさがこみ上げると、湧き上がる感情を押し殺して家まで運んだ。男の後を銀毛のキツネが、足音を立てずについて行く。

男の家は森林の奥深く、
〈禁域〉の近くに存在する

猟師の作業小屋だった。

目の前には水汲み井戸と、

草だらけで荒れた小さな畑もある。

小屋には猟師が使う道具が揃っており、

捕獲用の罟、解体用の鋸や木槌、

野犬やオオカミ用の毒槍などもあった。

小屋にシカを入れて、

首を縛って屠体を吊し上げる。

だが大きなツノが邪魔をしたので、

戻して台に降ろし、先に鋸で切り落とした。

(いや、最初から逆さに吊れば良かったのか。)

今まで獲ってきた仔シカや牝鹿であれば

これまで通りで良かったが、

体格の大きな牡鹿に対して

作業の効率まで考えては居なかった。

手際の悪さを痛感し、男は肩で息をする。

赤い髪の中から汗が垂れ、

イノシシの皮を脱ぐと小屋に蒸気が立ち昇る。

成人したばかりの男に、

大人のシカを運ぶのは重労働であった。

しかし、長々と休んでも居られない。

男の作業は多い。

まずは毛皮を剥く。

山刀の刃を足首に回して皮を切り、

そこから中心の腹に向け切り込みを入れる。

切り込みを入れた毛皮を親指で摘み、

引つ張りながら刃先を入れれば

毛皮は綺麗に剥がれていく。

首も同様に行い

毛皮と肉の間に刃を入れて剥ぐ。

首と足を終え、3分の1ほど剥げば、

あとは素手で引つ張るだけで全身剥ける。

皮下脂肪の少ない

シカならではの簡略化できる作業。

同時に、体毛からの穢れを避けるために、

肉に触れないよう気をつけなければいけない。

シカはほとんどの毛皮を失い、

赤と白に覆われた『新鮮』な肉の姿になる。

内臓と同じく、肉には

腫れや傷などによる問題は見られない。

解体作業は肉を骨の付いた状態に切り分け、

塩漬けにして肉の中の

血液と水分を奪う『血絞り』を行う。

3日ほど塩に漬けた後に、燻煙すると

完全に水分を奪った保存食の燻製が完成する。

雪でも積もっていれば、

肉をそのまま冷凍し長期の保存が効く。

あいにく『収穫祭』もまだ迎えていない。

それから剥いた毛皮を保管する為、

毛を下面にして台の上に広げる。

シカの皮に尾は必要無いので、

山刀で毛皮に弧を描いて切る。

皮にはまだ脂と肉が付いていて、

首のあたりは特に赤い血の塊が広がる。

そこから腐りでもすれば毛皮はダメになる。

塩を皮全体に渡るように手で満遍なく擦り込む。

塩が肉や脂から水分を奪い、

皮全体を腐りにくくする。

仕組みとしては肉の『血絞り』に近い。

皮の端は塩の擦り込みが

特に疎かになりがちなので、

折りたたんで皮同士で擦り揉みする。

塩を全体に行き渡らせたら折りたたみ、

毛皮の保存作業はひとまず完了する。

——はらへったのう。

突然声がし、手を止めた。

(気のせいかな……)

そう思ったが、小屋の窓から見る。

「もう昼過ぎとるなあ。」

外の景色は日が傾いて夕方に近い。

男は解体の作業に時間を掛けすぎていた。

それと食事と休憩さえも忘れていた。

脂と塩にまみれた手を、石鹼と軽石で洗い落とす。

毛皮の『脱脂』作業もしなければいけないが、

明日は町へ行く日であった。

秋晴れの空の様子をぼんやり見て小屋を出ると、

キツネが堂々と寝転がっていた。

思わず踏みつけそうになるのを避け、片足で飛び跳ねそのまま畑に到着した。引っこ抜きたいびつな根菜の土を払う。

「死んでんのか？」

小屋に戻る途中で顔を覗くと、

キツネが起きて目があつた。

キツネはそのそりと立ち上がり、

前足と後ろ足を交互に伸ばして背伸びしてから、

後ろ足をまたよたりと横に倒して

会つた時と同じ格好で座つた。

若いキツネではあるが、

冬を前にして身体はやせ細っている。

(毛皮にしたところで売れるんか。)

金毛でも赤土色の毛でもない、

暗い銀色のキツネを品定めする。

——はらへつたのう。

(たしか開祖と馬の話だったような…。)

口に出さずに、男はつばを飲んだ。

父が昔に語った〈アラズ〉の説話、

〈太陽神クサン〉と開祖と馬の話を

思い出したが、それもすぐにかき消えた。

(これはいい話じゃなかったな…。)

そうして男は気づかない振りをした。

キツネは男を見つめる。

何をするでもなく、その目で訴えてくる。

彼はキツネが何を言いたいのか分かっている。

男は手にした根菜を振り上げて威嚇して見たが、

反応に乏しい動物を相手にする虚しさと、

これから自分の腹に入れるものを投げる

アホらしさで踵を返して小屋に戻った。

「食べもん粗末にすんな。つてな。」

顎を親指で撫でて、父の教えに仕草を真似した。

かまどに火を入れ、

鍋に水と木槌で折ったウサギの骨、

畑で採って水洗いした葉と根を
適当な大きさに切って入れる。

野菜に火が通れば骨を取り出し、

燻製にして保存していた硬いウサギの肉を
木槌で割って煮込む。

「塩で適当に味付けすりや、食えるだろ。」

男は料理が雑な為に、

父の教えはここで妥協する。

鍋いっぱいひでひとり分には量も多いが、

あとはパンを焼けば夜も済ませられる。

「奮発してみたが、今日もウサギか。

なんとも代わり映えせんな。」

顎を親指で撫でて、ひとりごちた。

——シカは？

「あつ…。」

肉を失ったシカの変わり果てた姿を見て、

男は思わず声を漏らした。

朝食は石のように硬いパンを水でふやかし、樹皮のようになったウサギの古い燻製を齧る。

シカ肉は解体して保存に回したが作業に没頭し過ぎるあまり、

結局ひと口も食べては居なかつた。

『なめし』を終えた毛皮を畳み、

革の背囊に詰め込む。

牡鹿の皮はまだ保存したまま、

後日『脱脂』しなくてはいけない。

(シカのツノはどうしたもんか……。)

初めて狩った牡鹿の、杖状に広がる

大きなツノは背囊に収まらない。

ツノを立てて肩のあたりから

背中に刺すようにしたが、収まりも悪い。

重さもあるので背囊を破損しかねない。

(『ご主人』に聞いてからでいいか。)

結局、毛皮の買い手である『ご主人』に判断を仰ぐことにした。

持ち歩くにも運ぶにも、とにかく邪魔であつた。

町へ行く前に村に寄ろうと思ひ

早めに小屋を出ると、昨日と同じく

銀毛のキツネが丸くなつていた。

「おめえ…、まだ居るんか。」

驚いた男は思わず訛り混じりに

キツネに呼びかけた。

キツネは男の声に耳を立てると、

首を上げて彼を見た。

一度大きなあくびをしてから、

立ち上がつて伸びをして、

いつものように後ろ足をよたり倒して座る。

昨日からずつとこんなところに眠り、

荒れた畑を荒らすことなく居座る。

キツネは犬に似ているがあまり群れず、

単独または家族単位で行動する。

時には田畑や民家を荒らす害獣とされる。

しかし小屋に入つて肉を奪うこともせず、

生活を共にする群れにも戻らず、

やせ細り死を待っている。

(こいつも家族が居らんのか…。)

男はキツネに自分の境遇を重ねて哀れんだ。

——はらへつたのう。

(は?)

頭に浮かび上がった言葉に疑問に思った。

男は朝食を終えたばかりで、

空腹を訴えることはない。

そして男は気づいて居た。

——シカは？

「シカは『血絞り』の最中だが…。」

これから町に出かけるはずの男は、

今になってなぜ肉の確認をして、

あまつさえ喋っているのか。

(誰に向かつて…。)

しかし、疑問よりも先に

男はキツネに返事をしてしまった。

——にく。

——やいて。

——はらへったのう…。

男の声にキツネが目で、

その言葉で、彼に訴えかける。

「何なんだ、いったい?」

(魂が荒れたのか?)

理解し難い状況に

赤毛の頭を両手で掻きむしった。

——ノミか?

——もも肉。

——ごはん。

——はらへったんじやと言うとろう!。

、キツネの言葉は次から次へと
頭の中に押し寄せる。

(このキツネ、何かやつとる！)

頭が混乱した男には、

そうとしか考えられなかった。

男は気づいてしまった。

「おめえ！」

不可解な状況に男は大声を上げた。

するとキツネの言葉はピタリと止んだ。

ただ、キツネはそれでも目と

大きく振った尻尾で訴えてくる。

「なんだ…？」

——もも肉。

頭の整理が付かないまま、

キツネの言葉に男は頷いた。

「もも肉…。」

——焼いて。

——しお抜き。

——ごはん。

——もも肉。もも肉！

キツネはそれから前足を忙しく動かして、その場で足踏みした。

「わかった。静かにしろ。

そしたら頼むからどっか行ってくれ。」

男の訴えで再びキツネの言葉は止んだ。

獵師が獣に対し、餌付けすることはない。

餌付けをすれば付きまとわれるだけでは済まない。

人が餌をくれる動物だと認識し人里に降り、

餌をくれなければ攻撃的になって噛み付き、

家屋にまで侵入して子どもを襲うこともある。

ただ男には、小屋の前で

ずっと丸まっているやせ細ったキツネが、

そんなことをするとは考えられなかった。

(もしもそんなことになったんなら…。)

男は頭の中で、そのことを考えた。

キツネの要求するもも肉は、

塩漬けして『血絞り』の最中であつた。

ひとりですぐに食べきれぬ量でもない。

(ここで死なれても困るしな…。)

自分で自分を説得し、

男はひとつ息をつく

小屋に戻つた。

後ろ足のものも枝肉を塩山から掘り出し、

薄い前側を山刀で切つて取り出す。

まだ水分が抜けきつていない肉だが、

キツネの要求通りに水に漬けて塩を抜く。

キツネは、小屋の前で座つて男の様子を見ている。

——焼いて。

(注文の多いキツネだ…。)

またため息をついて、かまどに火を入れた。

温まつた鉄鍋に油を敷いて、

塩抜きした肉を焼く。

表面の水が蒸発して油が弾け飛び、

蒸気が逃げ場を求めて肉を押し動かす。

熱せられた肉は縮み、

裏返せば濃い土色に変わって匂いを放つ。

——香料は？

「こーしんりお…、そんなもん無いが？」

——小さい肉は食わん。

「獣のくせに…。」

まあ、酒で良いか…。」

〈フアタ〉の酒を少量、肉と一緒に焼く。

(焼く前に肉に漬けるんじゃないやなかったか…?)

男には酒を使った調理などしたことが無かった。

父が隠れて作っていた酒であったが、

男の好みでは無く、使わずに居た代物だった。

——ウツワは？

まだ熱い鉄鍋を地面に置くと、キツネが

一度下げた首を上げて男に抗議した。

「は？ 器？」

鍋で食えるだろ。

このまま食え。このまま。」

——火傷せいと言うのかお主は。

——これじゃから男子はのう…。

——犬ころであるまいし…。

「犬…」。

オレは普段からこうだが…。」

キツネも野犬も大差はない。

しかし鍋でそのまま食べる男が、

キツネ相手に犬ころ扱いされた。

埃を被っていた木碗を洗い、

焼いた肉を雑に盛った。

——焼き過ぎで硬くなつとる。

——こやつなぞは焦げとるわ。

——野菜を食わんと消化に悪い。

——ああ、こや、もうちと塩気が欲しいの。

——山羊乳で煮込むべきじゃ。

「獣のくせに……。」

妙に知識があつて文句が多い。

肉を焼いただけの料理に

文句の言葉を並べる割に、

器に口を突つ込みガツガツと食べる。

その姿はやはり犬だった。

「うまいか？」

——せつかく奪つた命じゃろ。

——食うてやるのがわしの役目じゃ。

「獣は焼いた肉を器使つて食いはせん。」

キツネがあまりに美味そうに食べるので、

男はそれが羨ましくなってきた。

器を空にし肉を食べ終えたキツネは満足し、

再び丸くなった。しかしそれは小屋の中だった。

「オレの寢床だぞ！」

——ちよつと横になるだけじゃ。

男の寢床で、キツネは大あくびをする。

キツネは否定したが人間臭い言葉に、

確信があつた。

(こいつは必ず寝る…。)

「食つたらどつか行くんじゃないのか！」

一方的に押し付けた約束を反故にされ

男は銀毛の腹に手を突つ込み、持ち上げて

やせ細つた身体を退かそうと試みた。

だがキツネが起きる気配はまったくない。

「こりや…傷か…？」

腹を縦に走る傷跡が男の手に触れた。

獣同士の占有域の主張か、

イノシシなどはメスの奪い合いで傷を負う。

そこに虫が湧くものや毒が入って腐るなど、

狩つたところで肉も皮もがダメな場合がある。

「シカか、イノシシか…？」

触れた鋭利な傷跡が、別のものと気づき、
恐れてさつと手を引いた。

(なんだ…?)

傷跡に、男は何かに怯えていた。

怯えたものの、起きたキツネと目があった。

——ハレンチめ。

——わしの乳に欲情するとは。

「せんわ!」

ニヤニヤするキツネの頬をつねって伸ばした。

03 足枷の道

小屋のある森林から南西へ、

島の端、〈サンクラ〉の町へ

男は背囊はいのうに詰めた毛皮を運ぶ。

森林を抜けると、

田畑の境界を作る畦路あぜみちを歩く。

田に実る〈フアタ〉は金色に色づき、

農夫らが一家総出で

刈り入れをする姿が見られた。

「『収穫祭』が近いな。」

秋の収穫を祝う『収穫祭』が行われれば、

もうすぐ冬が来る。

刈り取った〈フアタ〉の穂は乾かし、

脱穀し、もみすりして、粉にする。

水と塩を混ぜてこね、焼けばパンになる。

発芽の混じった安い粉から作ったパンは、水に漬けておけば、まずい酒へと変わる。

酒は大人の疲労回復として親しまれるが、男は味に耐えられず飲むことは無かった。

〈フアタ〉はどの町でも収穫できるが、

比較的温暖なこの町で蒸留した酒は

町の名前を付けた〈サンクラ酒〉として、

外の町へと運ばれて売られる。

ふたりの子どもは

手伝いをせずに、遊び回っている。

藁わらに足を取られて転んだ小さな子どもが泣いた。

抱き起こす父親の姿があった、

慰める母親が果物を口に押し込み

小さな子どもを泣き止ませる。

それを見ていた、大きな方の子どもも

両親に抱きついてねだった。

その光景に、男はつばを飲んだ。

畦路あぜみちを抜け、風除けのための

低木からなる畦畔林けいはんりんの農道を歩く。

山とある〈フアタ〉を積んだ荷車を牽ひく

土色や暗い煤色すすの髪をした〈エンカー族〉。

両足には鎖で足枷かせがされた奴隷。

彼らに鞭打ち運ぎばせるのが、

剣を携えた金髪の〈ソーンの民〉。

「そこをどけ、〈ナルキア族〉！」

〈ソーンの民〉の罵声に肩を驚かせ、

〈ナルキア族〉の、赤髪の男は

道の端に避けて荷車を見送った。

髪の色はこの島に暮らす上で重要な意味を持つが、

猟師である赤髪の男には、同じ人間であるのに

牛馬の如く使われる理由が理解できなかつた。

彼の生まれ育った村には赤髪以外の人間は居ない。

（〈ソーンの民〉は牛馬を使わんのか？）

「お前めえさんは〈ナルキア族〉だから、

今はまだわからんかもしれないがな。」

奴隷を使う彼らを見て、湧き立つ疑問に

『ご主人』が言っていた言葉を頭の中で反芻した。

『ご主人』は町に住む

〈ソーンの民〉の商人である。

男の毛皮や農家の〈フアタ〉、

製造所で作られた〈サンクラ酒〉を買い、

外の町へ売り、外の町から別の商品を

〈サンクラ〉の町へ仕入れる。

生産はしないものの農家や店の代わりに、

商品の売買するのが商人である。

「もちろん〈エンカー族〉も商品だ。」

と、『ご主人』は不快をあらわに言った。

夕時の鐘が打たれて町に響く。

キツネの餌付けに時間を取られ出発が遅れたが、

村に寄らなかつたので予定通りの到着であつた。

金髪の〈ソーンの民〉が大勢住む

〈ケークロ国〉北西、〈サンクラ〉の町で、

赤髪の〈ナルキア族〉である男は

否が応でも目立ち、奇異の目で見られる。

また、町の子どもたちが男を見つけると、

「赤いのししー」と呼びかけては

鼻を摘んだ仕草でからかい、

目を合わせると兎のように逃げていく。

しかし『ご主人』は獵師めえという生業を

「お前めえさんの仕事は誇るべきだ。」

と言い、拙い出来の皮を買ってくれた。

『ご主人』の住む館は

豪華なレンガ造りの2階建てで、

隣には〈サンクラ酒〉を入れる

大きな倉庫も建てられている。

イノシシさえも通さぬ背の高い

頑丈な鉄の格子に囲まれ、

男は石材をモルタルで固めた

アーチ状の裏門へと回る。

裏門に釣られた小さな金色の鐘を引き、
カランカランと乾いた音を鳴らして

訪問を知らせる。

「だあれも来やせん。」

普段であれば庭の手入れをする

使用人を通して、『ご主人』がやってくる。

「使用人も居らんのか。」

落ち葉が庭に散っている。

しばらく経っても誰も来ない為に

もう一度鐘を引いて鳴らした。

「はい。」

金の鐘よりも澄んだ女の声が返ってきた。

館の裏戸から妙齢の婦人が、

靴のかかたと悪戦苦闘して駆け寄ってきた。

（誰だ？）

男は見知らぬ女が出てきて目を点にする。

藍色に染め上げた服は

使用人にしては綺麗な装いで、

髪の色も透明掛かった金色をしている。

(おくがた様はこんな若かったのか?)

男は驚いたあまり黙ってずっと見ていた。

「ごめんなさいね。」

父がまだ…仕事で帰って来て無くて…。」

「あつ、はい。」

女が『ご主人』の娘であることに気づき、

男は慌てて背囊はいのうを降ろし、毛皮を取り出した。

「これを…。」

上手く言葉が出ずに、一番上にあつた

小さな煤色すすの毛皮を取り出した。

娘は明るい青色の目で、男をじろりと見た。

目の前の男は、娘より若く小柄だった。

赤い髪の「ナルキア族」で、

イノシシの毛皮を背負った獵師をしている。

それが町の人間や

子どもに鼻つまみ者にされる。

娘をとりまくツンとした香料が、

男の鼻にむずがゆさをもたらす。

(ああ、そうか。オレが獣臭いのか。)

なんだか酷く惨めに思え、

男は目を伏せて耳まで赤くした。

「あなた年齢は？」

「は…？ ねんれい…とし。」

…14だ。です。」

娘の突飛な質問に虚を衝かれた。

男は今年成人したばかりだった。

「そうか…。〈ナルキア族〉の獵師なら、

もう大人なのね。」

と娘は自分に言い聞かせるように呟いた。

「使いと勘違いしてしまい大変な失礼しました。

わたくしは、フィン家当主ハンヌの娘で、

コンスの孫、キルス・フィンと申します。」

キルスと名乗った娘は両手を交差させ、手のひらを肩に軽く乗せて会釈した。

男も右手を握りこぶしにして

左肩に乗せ会釈を交わす。

町では男女で礼の作法が異なることを

男はここに来て初めて知った。

村では性別に関わらず、同じ礼をする。

「先月、母が〈アラズ〉の元へと発ち、

急遽^{きよ}〈サンクラ〉に戻って来ましたので

存じ上げなかったとはいえ、本当に。」

キルスは再び会釈をしたので、

男も戸惑い礼を繰り返した。

04 蛇と神々と魂の行き先

「オレ…わたくしは、ヨエルと申します？ だ。」

キルスを真似して極力相手を敬った

言葉使いを心がけた〈ナルキア族〉の男だが、彼女の口調を真似ただけですぐに綻びほころびが出た。

「ヨエル・ケシン…、です。」

「ヨエルさん、ね。」

「そうですか、おくがた様が…。」

オ…わたくし、知らない、かった、です。」

ヨエルはたどたどしい言葉の後で

背囊はいのうの前に跪ひざまずいて毛皮を置き、

両の手のひらを空に向ける。

「…〈アラズ〉の元へ。」

祝詞のりとを上げ、神々の元へと発つ魂を導いた。

大海に棲み、大地を飲み込む罪多き蛇。

〈アラズ〉の神々は蛇に手を与え、

罪を贖あなわせる機会を与え、人へと変えた。

肉体を大地に縛り、魂を導く使命を蛇に与えた。

蛇は人となり、人は魂の導く手となった。

〈アラズ〉によつて世界は生まれ、

開祖は旅立つ魂の行き先を人々に教え広めた。

肉体を失つた魂はみな、

大地の束縛から開放される。

〈太陽神クサン〉と月神〈クリエム〉に迎えられ、

4年掛けて〈アラズ〉の神々の元へたどり着く。

導くものが多いほど、その魂は早く

〈アラズ〉に着くとされる。

〈ナルキア族〉も、

〈大陸聖教〉と同じ教理ですのね。」

「…わから、知りません?」

キルスの言葉にヨエルは首を傾げる。

父や母、村の者たちは人の死に対し

手のひらを空に向ける同様の仕草をするので、年若いヨエルも大人を真似ているに過ぎなかった。

「へアラズ」の神、導きの教理。」

キルスはヘソの前で組んでいた手を、

正面のヨエルに差し出すようにして、

肘を曲げたまま手のひらを天に向ける。

肘は綺麗に直角に曲がり、

手は指先まで真つ直ぐ伸びている。

背筋がすらりと伸び、顎あごを引き、正面を見て、

頭の前から引つ張られるようにして立つ。

彼女の美しい姿勢に、

ヨエルは村との違いに驚いた。

「教理。」

彼女の言った知らない言葉をヨエルは繰り返した。

「へアラズ」の教えのひとつのことね。

死んだ人の魂が旅立つ理由。その理。」

「ことわり。わかった、ね。」

「ふふ。貴方、さつきから無理して

ずつと変な言葉遣いになつてゐるわ。」

「すまん。」

オレは…わからん。」

話せば話すほどに男は綻ほころびが出るので、

恥はずかしさのあまり言葉が出なくなつた。

「〈アラズ〉は〈ソーンの民〉の神さまで、

〈ソーン〉は大陸の北西側ね。

はるか海の向こうの聖教国よ。

大陸から渡つてきた信徒たちによつて、

〈ナルキア族〉にまで布教したのね。」

「島…。」

（大陸があつて、国があつて、島があつて、

そこに大陸の信徒が教理とやらを

広めにやつてきた…。）

頭の中でキルスの言葉を想像したが、

ヨエルは整理が付かず小さく首を傾げた。

「ここは〈ケーロ国〉。島の南側の西部。」

キルスは庭の落枝を拾って来て、

細い指で巧みに地面に地図を描いた。

丸、大きな島。

それから左から下に、はるか遠くの大陸。

北、南西、南と3つの土地が連なる陸地。

大陸の北側はキルスの言った〈聖教国ゾーン〉。

丸く大きな島は

左と右に深く小さな切り込みが入り、

上下に、南北に分断される。

南側は中央に河を挟み、さらに東西に国が別れる。

河が分岐した先には

島を見つけた〈聖人ラツガ〉が築いた

〈南部港キアン〉がある。

ヨエルが住んでいる場所は、

島の南側西部の〈ケーロ国〉。

そして分断された島の真ん中、

〈煤吹山〉を囲む大きな丸を見て

彼は眩くらいた。

「〈禁域〉だ。」

それはヨエルも知る禁猟区の深き森、
白い柱に囲まれた場所。

彼の言葉に、キルスは嬉しそうに頷いた。

「〈禁域〉。島の所有者が住む場所ね。」

そしてここが〈サンクラ〉。」

分断された南側の、西南西の端。

「ヨエルさんは？ どこから来たの？」

キルスに棒を手渡される。

獣の脂と泥に汚れたような

ヨエルの煤すすっぽい手とは違い、

キルスの手は〈ファタ〉の粉のように

白く柔らかかった。

地図などは旅商人が持ってきた

幼い頃に一度見たきりで、

ヨエルはあまり覚えていない。

ヨエルの生まれ育った村は西の端。

巨大な崖の見える集落。

切り立つ大きな自然岩。

〈ナルキア族〉の村。

「() () ?」

ヨエルの住む小屋は

村からさらに東へ行った森林で、

〈禁域〉近くに疑問混じりで丸を描いた。

「まあ、ヨエルさんは、

〈禁域〉へは行ったことがあるの?」

キルスは綺麗な青色の目を

さらに輝かせて尋ねてきた。

ヨエルは驚いて、

それから済まなそうに強く首を振った。

彼は〈禁域〉には入ったことはない。

(入れば〈煤まみれ〉になる…。)

「わたしね、

先月まで〈中央〉で学士として働いていたの。

算術は島内だけでなく大陸との貿易に使えて、

物の出入りは全部数字で見ることができなのよ。

大陸は〈聖教〉の美術品や工芸品や楽器、

島の北側からは、寒い南側では育たないような

野菜や果物、種や苗、樹皮や樹脂が手に入るの。

あとは宝石や鉱物、珍しい動物とかもね。」

砕けた口調で口早に語るキルスに、

ヨエルは首を半分傾げながら頷く。

「でも南側って、〈聖人ラツガ〉が築いた

〈キアン〉にしか船の入れる場所が無いから、

ここで商品が壊れたり紛失したり盗まれたり、

野菜や果物なんかは腐ったりもして、

本来得られるべき数字を失ってしまうの。」

西の大陸から伸びた線と、

北側から島を半周した線が2本、

島の南下にある点に集中する。

〈聖人ラツガ〉が発見した島の南の入り口。

〈南部港キアン〉。

子どもたちが恐れる町の名前。

キルスは大まかな船の航路を地面に描いた。

ヨエルは船の姿を思い出した。

（あんなのアリにしか見えん。）

村の崖から見える小さな船を、

幼いヨエルは遠く眺めた。

（あれに村の人よりも、

いっぱいの人が乗つとるのか。）

遠くの船をずっと見ている、

小さな親指の太さの分も進んでいない。

（歩いて運んだほうが早そうだが、

牛が海を泳いで船を引っ張るのかな…。）

両手の親指を右手は顔に近づけ、

左手は腕を伸ばして遠ざける。

右手は右側に、左手は左側に見える。

片目を閉じると片方の指に焦点が合う。

近くの右手に合わせると左手がぼやけ、

遠くの左手に合わせると右手がぼやける。

それから両手を同じ方向に

右から左へと同じ速度で動かす。

顔に近い右の指ほど大きく見えて早く過ぎ、

顔に遠い左の指ほど小さく見えて遅く過ぎる。

すると右手の親指は左側に、

左手は右側に追いついてしまった。

ヨエルは結果に首を傾げた。

知恵ある者にとつては単純な事であっても、

島の片隅に住み、村のことしか知らない

ヨエルには疑問が尽きなかった。

疑問は目で見えることなのに、

分からないことだらけだった。

「人と獣はどうして違うのか。

じいちゃんをどうして埋めるのか。

どうして島は海に浮いて動かないのか。

太陽と月がどうして入れ替わるのか。

〈アラズ〉はどこにあるのか。

遠くの〈煤吹山^{すすふき}〉はどうして大きいのか。

〈禁域〉には何がすんでるのか。」

小さな体から絶えずあふれ出る疑問は、

家族や村の人たちを困らせるだけだった。

弟ができたヨエルはそれから兄として、

獵師としての仕事を覚えることに専念した。

ヨエルはキルスの言っていることが

話半分も理解出来なかったが、会話の流れと

地図に描かれた線で言いたいことが分かった。

島の〈南部港キアン〉から

島の北まで半周した細い線と、

大陸の〈聖教国ゾーン〉へと長く伸びた線。

風が吹けば今にも消えそうな線が、

現在の輸送の航路になっている。

「キルス、さんは、ここに欲しい?」

ヨエルは地面に指で線を描いた。

木の棒の線よりも太く短い2本の直線は

南北に分断された切り込みの西から大陸に、

もうひとつは〈禁域〉を抜けて北へと向った。

(魂にしか永遠はない。)

時間が経てば、肉は腐り、骨は土に還る。)

顎^{あご}を親指で撫でる。

父の父、祖父のまた祖父から続く教え。

時間は限られ、物は形を保てなくなる。

キルスの悩みをヨエルなりに解釈すると、

運ぶためにたどる道が長く細いことだ。

狭い道で運べるものの量は限られる。

田畑を隔てるだけの狭い畦路^{あぜみち}よりも、

広い農道の方が多くの人を通れる。

それに物を運ぶのならひとより荷車、

荷車には牛馬が必要。もしくは奴隸。

そして荷車よりも大きな船であれば、

村人まるごと運べてしまう。

ヨエルがここへ来る前、畦畔林けいはんりんの農道で、

荷車に轆かれそうになったのを思い出した。

(道が広くて短かければ、運べる物も増える。)

海路を短くする、陸路を太くする、

それならば単純に〈禁域〉を使う手は無い。

(でもこれは……)

答えは単純明快だったが、

解決は困難だとヨエルは悲観した。

「そう！ ヨエルさんは、若いのに賢いのね。」

ヨエルの想像に反し、

その困り顔を見たキルスは喜ぶ。

しゃがんで地面に描いた地図の線を見る。

小さくなつた彼女は、

首を大きく縦に振つて頷いた。

長い金色の髪は背中まで伸びて、

先が紐で縛られている。

長く綺麗な赤髪をたてぐし豎櫛を使って

器用に後ろでまとめる母の姿を思い出して、

ヨエルは黙つてつばを飲んだ。

「〈禁域〉は東西どちらの国も、

過去に何度も調査に兵隊を出したけど

誰ひとりとして帰つて来ないの。」

田舎者のヨエルでも思いつくような

単純明快なキルスの輸送路短縮計画は、

昔の人がずっと思い悩み、

何度も試していたことだった。

（〈禁域〉には入れない。）

森林に住むヨエルであつても、

〈禁域〉の境界を越えることは叶わない。

父もヨエルに厳しく言いつけた。

「〈煤すすまみれ〉…。」

境界から向こうに行けば、人は炭となる。

ヨエルは真つ黒になった人間の

変わり果てた姿を思い出し、

振り払おうと煤色すすの毛皮を掴んだ。

「ああ、しまった。

仕事の中なのにおしやべりが過ぎちやつたわ！

わたしってば…。ごめんね。

ヨエルは他の取引相手と違って若いから、

つい教室みたいにしやべっちゃって。」

「きょーしつ?。」

「あ、言ってなかったね。

わたしはこの町で今は先生をやってるの。

弟や子どもたち相手に教えてるのは

簡単な文字と計算くらいだけだね。」

「せんせい。キルス…せんせい?。」

教室という物を知らなければ、

ヨエルは先生というのも初めて耳にした。

猟師の教えは基本、親から子へ、

または師匠から弟子と、

その知識と技術を受け継ぐ。

「よしてよ、先生だなんて。

まだ始めたばかりで、子どもたちなんて

わたしの言うこと全然聞かないんだし。

特に弟のアークスは生意気真つ盛りなの。」

「弟。」

(もう〈アラズ〉の元に着いたか。

みんなが来るのを待っているのか。)

ヨエルも自分の弟のことを少し思い出し、

家族の話をするキルスが羨ましく感じた。

「商人の娘をもし先生なんて呼ぶようなら、

猟師のヨエルさん払うべき毛皮の代金より

わたしはヨエル生徒から授業料を貰わないと。」

キルスは片目を一瞬閉じて、

目で合図すると口角を上げた。

「うん、あべこべだ。」

合図の意味するところが、

キルスの冗談であることを察して彼は頷いた。

「そうよね。」

わたしのことはキルスでいいわ。

堅苦しい喋り方もしなくていい。

商売はお互い持ちっ持たれっ、だからね。」

キルスは地域への奉仕として教えていただけで、

お金を取る気は毛の先ほども無かった。

「キルス……」

改めて名前を呼ぶと、

ヨエルは少し気恥ずかしくなった。

「ええ、ヨエルさん……じゃなかった。ヨエル。」

自ら提案したキルスが

さっそく失敗して照れ笑うので、

ヨエルもぎこちなく笑った。

05 商人と獵師

「仔シカは一律、2へフーガ」。

ムジナは土毛と煤毛すすが5へフーガ」。

キツネは赤だと20へフーガ」。

キツネはもちろん体と尻尾付きね。

あ、金毛はすべて倍になるのよ。」

目を見開いて驚くヨエルに、

商人の娘でしかないキルスは買値を述べて

さも自慢気に胸を張った。

「どう？ 凄いでしょ、わたし。」

「そりゃ、それ見たらオレだって分かる。」

彼女が後手に隠した覚書を指摘した。

分かると言った手前だが、言った本人は

書かれているへソーン文字」を読めない。

「あら、バレてた？」

覚書で目を隠して恥ずかしそうにするキルスに、

ヨエルは首を縦に振って、それから横に振った。

「そうでなくて。へーガ」が違うんだ。」

「値段？」

首をひねってキルスは覚書を見直す。

「毛の色は関係せん。」

ヨエルは普段の毛皮の値段を言った。

「ああ、それはきつと父の仕業ね。」

なんとなく理由に気づいて、

キルスは頷きつつも

ヨエルの赤い髪の毛を見て言葉を探った。

「仔シカとムジナの値段の違いは、

たぶん用途よね。」

「シカとイノシシは、クツかカバンになる。」

「そんな感じなのね。」

わたしは商品ばっか見ちやうから、

皮の材質で作るものは変わるんだね。」

「ムジナとキツネは首巻き。」

「…ああ、襟巻き？」

〈中央〉ではよく見かけたわ。」

少し前のことをキルスは懐かしんだ。

キルスの言う〈中央〉は、

島の南側西部〈ケーロ国〉の首都

〈カーオ〉を示すが、呼びにくいので

〈中央〉の呼び名で親しまれている。

彼女は先月までそこで学士をしていた。

「〈中央〉にも獵師が居るんか？」

「〈ケーロ〉の首都だもの見かけないわ。」

〈アラズ〉の信徒や商人と町の人ばかり。

獵師はキツネの襟巻きをするの？」

「するやつは居った。暑いからすぐ脱ぐが。」

「あはは。そうか、森林を動き回るもんね。」

「それに目立つ。」

〈ナルキア族〉の獵師の背負うイノシシの皮は、

赤い髪を隠す為に首から顔の皮を残しており、
頭巾とすることもできる。

「それは大変。」

猟師が猟をできなくちゃ、死活問題よね。」

「死活問題。」

キルスの口から出る

知らない言葉を自然と繰り返して、

ヨエルは口角を上げた。

「〈中央〉にも、猟師と同じで欲しい人と

欲しくないって人が居るけれど…。

欲しい人はひとりやふたりじゃなくて

100人くらい、とにかくたくさん居るの。」

「多いな。」

「〈中央〉は当然村に住む人間より多く、

村の猟師は5人しか居なかった。

村に住む人が多くなればなるほど、

食料や衣料、家、冬を越す為の毛皮が必要になる。

5人の獵師だけで、村の生活は到底支えきれない。

貧しい家であれば、口減らしの為に

子どもを〈南部港キアン〉に売ることになる。

「そう。

でも今ここにはひとつしか無いから

奪い合いを避けるために、

欲しい人の中で一番高い値段で

買ってくれる人に売るのが商人。」

「金毛は〈ソーンの民〉の買い手が多い?」

「ヨエルは飲み込みが早いからね。」

獵師がイノシシの皮を背負うように、

金髪の〈ソーンの民〉にとつての

金毛はお守りみたいなものかも。」

キルスは目の前の幼い取引相手を

半ば先生の気分で生徒として見ていたが、

商人として素直に感心した。

「商人は商品を仕入れ、値段を決めて、

買いたいって言う他所の商人に売る。

買い手が多ければもつと高い値段をつける。

買われなければ商品の値段は下げる。」

「売れないのは安いのか。」

「売れるものも、安くするのよ。」

イタズラっぽい返答にヨエルは考えた。

「量の多い〈フアタ〉は安い……。」

〈フアタ〉の実は生活に欠かせない食材だが、

一粒一粒売り買いすることはまずしない。

そのため粒ではなく量で売る。

「シカも量が多いんか？」

「残念。当たり前じゃないわ。」

妙な言い回しをしたキルスは、

半分嬉しそうにしている。

シカは安く、よく獲れる皮のひとつだった。

その答えを否定されると、ヨエルに

考えられた答えは残りのひとつだけ。

「じゃあ、売り手が多いんだな。」

「大正解。」

キルスは胸の前で小さく拍手した。

「量が多ければ、売り手も多い。」

「お店がふたつ以上あつたら、

同じものでも安い方を買うでしょ？」

「わかる。」

ヨエルは買い物の経験は多くないが、

値の張るこぼん枯簀こぼんより量が多くて安い

ミヨウバンを決まって買う。

「人気のある商品を安売りすれば、

お客さんが集まって他の商品も買ってくれる。

「お客さんは他のお店に行く手間も省ける。」

「キルスの話は面白いな。」

ヨエルは深々と頷いた。

村にはこうした話をしてくれる人は居なかつた。

「でもね、商売をするのは商人だけじゃないの。」

「農家か？」

「獵師もね。」

商人は他所の土地に運んで売るのが仕事。

あ、運ぶのはもちろん業者だけだね。

その土地にはその土地の商品がある。

農地は穀物や野菜、港は魚介、果樹園は果物、

牧草地帯や養鶏場なら肉、乳、卵ってね。

あとは腸詰めやバターとかチーズの加工品、

他にも靴や服、香水や髪細工とか楽器、

鉄や動物の骨やツノで道具を作る職人も。」

すらすらと出るキルスの知識に、

行つたことも見たこともない市場の大きさを

ヨエルに容易に想像させた。

「そういう人たちの文化や生活があるのに、

同じ物を他所から持つてきて安く売ると、

今度は商人が売る物を無くしちゃう。

買い手が居なくちゃ作る人が居なくなっちゃう。

結局それは自分で自分の首を

絞めることに繋がっちゃうの。」

キルスは地面に絵を書いて、

さらにその説明を始めた。

〈サンクラ酒〉を造るこの町で、

ある外の商人が自分の商品を売りたいが為に、

製造所に『外のフアタ』を安く売る。

製造所は安い『外のフアタ』を喜んで買った。

生産量を増やし、労働者を増やすこともできる。

反面で〈サンクラ〉の農家は、育てていた

『町のフアタ』が売れなくなり離農する。

製造所の労働者になるかもしれない。

農家という町の仕入元が居なくなれば、

外の商人は『外のフアタ』の値段を戻す。

外の商人は〈サンクラ〉へ独占的に

『外のフアタ』を売ることができると。

業者での輸送の手間を含めれば当然、

〈サンクラ酒〉の農家から買っていた

『町のファタ』より値段は高い。

外の商人は自分の商品も売れ、

〈サンクラ酒〉の製造所も

手中に収めることに成功する。

しかし製造所は高くなった〈ファタ〉に

採算が合わなくなると、値上げを迫られる。

これまで安く買っていたツケが回ってくる。

製造所の労働者も減らされるかもしれない。

解雇という名の口減らしが起こる。

製造所の生産量が下がれば元を取る必要がある。

〈サンクラ酒〉の値上げは客離れを産み出し、

売れなくなれば製造所はさらに生産量を落とす。

労働者が農家に戻る頃には、

製造所は〈ファタ〉を買うこともままならない。

〈サンクラ酒〉の売れない製造所は無くなり、

雇用の無い町に人は居なくなる。

外の商人は〈サンクラ酒〉が作られなければ、

『外のファタ』も売れなくなり、

自分の商品を買う客であった

〈サンクラ〉の町さえも失ってしまう。

「オオカミの子どもを狩るな。」

ヨエルは顎あごを親指で撫でて呟いた。

興味深くキルスの話聞いてるうちに、

彼は父の言葉が思い浮かび口に出た。

「なにの話？」

「あ、獵師の言葉だ。森林に棲む

オオカミの毛皮は高く売れるけど…。」

「そうね。書いてある。ホントに高いのね。」

大人オオカミ80 〈ファーガ〉。

手元の覚書には、

金毛のキツネの倍の買値が付けられていて

キルスを驚かせた。

〈ケーク〉の国章はオオカミで、

大きく、毛深く、柔らかい皮は人気が高いが、過去の乱獲の影響があつて頭数は減少した。

「オオカミは群れを作つて、

イノシシやシカを追い込んで狩る。

畑を荒らすイノシシやシカ、

ムジナたちの敵はオオカミ。

それにかしこいから人里に降りやせん。

だから子どもの居らんオオカミは

狩つてはいかん。」

「商売と同じで、面白い訓話ね。

今年の収穫量は獣害が増えているもの。

イノシシ、シカ、ムジナ、キツネに野犬…。」

「そうだ。銀毛は？」

「銀？」

小屋に居着いた銀毛のキツネを思い出した。

珍しい毛色のキツネだった。

「銀は買い手が居ないわね。」

「いない?」

「〈中央〉でも出回ってるのを見たことないわ。

銀毛は〈クレワの民〉と同じ髪の色だもの。」

「〈エンカー族〉、〈ナルキア族〉、

〈ソーンの民〉、〈クレワの民〉。」

ヨエルは眩いた。

この島と大陸には

4つの人間が暮らしていて、

長年対立を繰り返していた。

島の南側を擁立する〈ソーン〉と〈クレワ〉。

〈聖教国ソーン〉、金髪の〈ソーンの民〉。

〈クレワ帝国〉、銀髪の〈クレワの民〉。

島の北側に住み着いた赤髪の〈ナルキア族〉。

大陸の両国に挟まれた緩衝地帯であつた

土色と暗い煤色すすの髪の〈エンカー族〉。

〈聖人ラツガ〉はこの2族を連れて

島の所有者から許しを得て、

〈南部港キアン〉を築き

島の南側を開拓した。

出自は〈エンカー〉とされる〈ラツガ〉の

髪の色は国によつて記録がまばらであり、

正しい髪色を知る者は居ない。

大陸の北西と南東に別れた金と銀の国は、

〈ラツガ〉の死後、島の南側を

〈ケーロ国〉と〈ヤーテ国〉に分け、

対立を何世代にも渡り続けた。

〈禁域〉に住まう島の所有者はこれに怒り、

町を丸ごと焼き払った。

その町は今でも死の町として遺されるという。

これが後世に伝えられる〈煤まみれ〉^{すすまみれ}であつた。

キルスはすらすらと地面に線を描き、

〈ソーン文字〉で国名と種族名を記述した。

学のないヨエルは読み書きができないものの、

キルスの綺麗な文字と丁寧な説明を

照らし合わせてしきりに頷いた。

（金毛は自国、銀毛は敵国。だから売れない。）

おかげで理屈は理解できた。

「銀毛は無い…よね。」

持ってきた毛皮に銀毛は無い。

キルスは覚書を再度確認した。

「うん。家に棲み着いた。変なヤツ…。」

ここまで言つて、口を噤む。

（言葉が分かる動物、なんて言えやせん。）

自身でも信じがたいことを軽々しく口にすれば

相手を戸惑わせたり、不審がられるに違いない。

しかしキルスはそんな話を

興味深そうにして彼を見た。

「大陸の獵師は犬と共に獵をして、

口笛や声で喋るみたいに指示を出すんだって。

牧羊犬と同じかしらね。」

「ぼくよー？」

「羊飼いは移動する群れの羊を誘導して、

犬に口笛ひとつで羊を追うように指示するの。

オオカミに似た犬を羊は怖がるけど、

そうやって羊たちをオオカミから守るの。

羊飼いの生活の相棒ね。」

(オオカミや犬と一緒にすると、

あのキツネは怒るだろうな。)

キルスは唇を尖らせて、口笛を吹く真似をした。

空気が抜けた音がした。

ヨエルも真似て口笛を吹くと、

高く鋭い綺麗な音が出た。

「わたしのは悪い見本ね。」

「できないだけじゃないか？」

「ヨエル先生、もう一回やって。」

「あべこべだ。」

キルスに請われ、
彼はもう一度口笛を吹き鳴らした。

06 別れた枝

「なにを遊んどる。」

呼びかけられたその声に、

ヨエルは肩を驚かせた。

裏戸から『ご主人』が出てきた。

商人ハンヌ・フィン。

赤ら顔で、乱れた服装の大男。

革の靴は踵かかとを踏んで、だらしなく歩く。

(ご主人はこんな顔だったか…?)

ヨエルは思わず眉をしかめた。

日差しの強い夏の頃、

成人したばかりのヨエルは皮を売るべく

初めて「サンクラ」の町に降りた。

(町なら売れると思ったが

どこへ行ったら売れるんだろうか……)

皮の売値を知らなければ、

そもそも売るあてもない為に途方に暮れた。

ボロをまとった外の人間は、

奇異の目で見られるばかりであつた。

(ひよつとして、

デカイ家なら買つてくれるんじゃないか?)

町の大きな館ならばと見込み、

若き猟師は安直に行動した。

大きな館に住むのは、相応に大きな獣だつた。

(こりや……、大陸にすむクマか。)

ヨエルは祖父の昔話でしか聞いたことのない、

巨大な獣を想像した。

目があつた途端にヨエルは身動きが取れず、

正門にあつた大きな金の鐘を叩く紐を

握つたまま、夏に大量の冷や汗をかいた。

そこは運良く商人ハンヌの屋敷であつた。

厳しく見える精悍な顔立ちに、

商人としては不相応に筋肉質の巨体。

明るい翠眼に、金髪を後頭部に撫で付け、

上下艶やかな黒色の服を揃え、金色の紐を

胸にあしらった豪華な服を着ている。

村では旅人や人買いなど商人以外、外の人間を

ろくに見たことがなかったへナルキア族は、

ハンヌの風貌に口を開けて驚いた。

「お前さんよお！」

ガキのイタズラじゃねえなら裏門へ回れ！」

第一声はそのようにしてこつぴどく怒られた。

使用人が目を瞑って驚いていた程だ。

それでもヨエルは素直に裏門へと周り、

背囊の中身の毛皮を見せた。

祖父が町の人間に毛皮を売っていたのを、

ヨエルは知っていた。

「仕方がねえなあ……。」

未熟な猟師の出来の悪い商品を見ると、

様々な条件を付けて渋々と取引に応じた。

それからは獲った皮をなめして、

月に一度は町へ降り、『ご主人』の館の

裏門に通うことになった。

「恩には恩を返せ。」

親への恩は子に返せ。」

父の言葉を思い出す。

〈ナルキア族〉が長く繁栄する為の、

〈アラズ〉の教理であった。

ヨエルは『ご主人』に恩を返すつもりで

獣を狩り、皮を作った。

先月会ったハンスとは違い、ヨエルには

彼がずいぶんとだらしなく別人にさえ見えた。

「あら、もう起きたんですの？

お身体の具合は？」

「さつからパイパイうつせえと思つたが、

アークスじゃねえのか。：へナルキア族か。」

「アークスはお外で遊んでいますわ。」

今は猟師のヨエルさんとお取引の最中ですよ。」

娘のキルスは片目を一瞬だけ閉じて、

ヨエルに目で合図した。

キルスが裏口から出てきた時は、

「父がまだ…仕事で帰って来て無くて…。」

と言っていた。

(ウソを黙っておけてることか?)

彼女はヨエルを欺いていた。

そのことを目の合図で察し、

ヨエルは何も言わなかった。

何よりキルスの方が、皮の買取額が多い。

ハンヌに告げ口する利点は彼には無かった。

「〈中央〉で数字遊びしていた娘が、

何を偉そうに。

…で、いくらで買った？」

「90〈フーガ〉ですわ。覚書の通り。」

「90だあ？」

ハンヌは皮を広げて数え出した。

仔シカ1枚2、ムジナ3枚15、キツネ2枚40。

「ああつ？ お前さんめえよお！」

これはどうみても、57だろ！」

普段のハンヌが対応したのであれば、

57〈フーガ〉しか出さない。

彼が大声を上げるのも無理はない。

覚書に従ったとしても

金毛の分でせいぜい82〈フーガ〉。

さらに8〈フーガ〉も多い。

「俺の金で勝手しやがって！」

あまりのことに憤いきどおったハンヌは、

ヨエルが手にしていた紙幣を叩き落とした。

大きな手で叩かれて驚くと同時に、

むせ返るような酒の臭いがヨエルの鼻を突く。

「冬備えの需要を見込めば、

金毛は買値の1.5倍で売れますもの。

1割加算は取引としては正常です。」

「こいつは〈ナルキア族〉だぞ。

んな革あ売れやしねえんだ！」

持ち込んだ商品に条件をつけたハンヌが叫ぶ。

「お祖父様でしたら、

相手の髪色で値段を変えるなど

失礼な真似はしません。」

キルスはこれ見よがしに覚書を叩いて見せた。

ただ、ハンヌがヨエルのこと〈ナルキア族〉と

呼びつけるのはいつものことだった。

「お前は^{めえ}この家を売る気か！」

「コンスお祖父様の館です！」

フィン家の名を^{けが}流すような行為を、

取引相手の手前、控えてください！」

鼻息荒くハンヌは罵声を浴びせ、

キルスの襟首を掴んだ。

キルスの鐘よりも澄んだ声は、

雷鳴のように鋭くなつて猛然と言り返す。

ハンヌの太い腕が

キルスの細い身体を軽々と持ち上げた。

キルヌはそれでも臆することなく、

視線の定まらないハンヌの目をジツと見つめる。

親に口答えする娘に対し

ハンヌはさらに怒鳴り散らすかと思ひ、

ヨエルはふたりの顔を交互に見て困惑する。

「お母様の魂は神々の元へと発ちました。」

キルスがそう言うとき、

ハンヌは両手を離し、ひざまず跪いて泣き声を上げた。

「うおお……クリスう……。」

大の大人が大声で泣く姿を見て、

ヨエルは心底驚いた。

ヨエルの住んでいた村の大人に
彼の様な泣き方をする者は居なかつた。

「お父様。」

キルスはハンヌの背中を擦り、

再び柔らかな声になり

家に戻つて休むように言つてきかせた。

小さくなつたハンヌの背中を見送つて、

キルスは皺になつた襟を整える。

「大変お見苦しいところを、

お見せしてしまいました。」

両の手を交差させ、手のひらを肩に乗せると、

キルスは初めて会つた時よりも深く頭を下げた。

地面に落ちた紙幣を拾い上げて皺を伸ばし、

ヨエルの手に握り渡した。

「ご主人は、どうしたんだ……？」

ヨエルは分かつていたが尋ねてしまった。

妻を失つた男の姿。

あの逞たくましかったハンヌが、

弱々しく泣きじゃくるのを見てしまったからだ。

夕日がキルスの金髪を少しだけ赤く染める。

「お父様は、お母様が旅立たれてから、

魂が荒れてしまったのです。」

キルスは初めて会った時の堅苦しい口調に戻り、

震える口で、下唇を小さく噛んだ。

明るかったキルスの顔が、

半分だけ夜の影に覆われた。

07 騒がしい夜の村

ヨエルは畦畔林けいはんりんの農道を北上する。

その足取りは重い。

月明かりが暗い夜道を照らしてくれた。

夜の鐘が鳴る前に買物物を済ませ、

ヨエルは森林の小屋に戻らず

島の西端の〈ナルキア族〉の村へと向かう。

(満月の日が取引の日で良かった…。)

普段であれば昼の内に村に着いていたのだが、

ヨエルは朝からキツネの妨害を受け、

今日に限って夜まで後回しになった。

キルスとの取引で多めに得たお金で、

岩塩とミヨウバンを背囊はいのうが埋まるほど買った。

これが無ければ肉を保存できず、皮も作れない。

大人用の背囊はいのうは多くの物が入るが、

ヨエルが背負って歩くと肩紐が食い込んで痛い。
「魂が荒れてしまったのです。」

キルスの言葉が、脳裏をよぎる。

彼女との会話はそれきりとなった。

『ご主人』ハンヌの魂が荒れた。

妻の死と決別できずに酒に溺れ、

子どものように理不尽に怒り、

子どものように悲しみ泣きじやくつた。

ヨエルはその姿が目に焼き付いて離れなかった。

けいはんりん
畦畔林は途中で切れ、

道には草が伸び切っている。

腰ほどの高さの草を掻き分けて、

使われなくなった道を歩く。

虫が鈴の音のような羽音を鳴らし、

草木のざわめきと共に雑音が響いた。

ハンヌの泣き声と嗚咽とがせめぎ合い、

ヨエルは気持ちの悪さに耳を塞いだ。

心臓の鼓動が高鳴る。

あの木立の向こうが村だ。

月明かりが家の輪郭を作り、

大人になつて間もない男を迎える。

ヨエルは村に帰つてきた。

家々は燃え朽ちており、

月日が経つて草に埋もれている。

夏に繁茂した草は、

土から得られる栄養を奪い合い

枯れていた。

村はへ煤すすまみれに遭つた。

燃え残つた柱は

雨風によつて根元が腐り倒され、

土でできたかまどは

崩れ落ちてその形を失っている。

誰も居ない村に帰つてきたヨエルは

ひとり佇んだ。

いつもの静寂が訪れる。

虫も鳥も、

誰の声も聞こえない。

口を開いて何かを言っても、

誰の耳にも届かない。

背囊はいのうを置いて、

村の奥へと歩く。

草を踏み、

広場を越える。

たどり着いたのは

ヨエルの家だった。

〈すす煤まみれ〉の家。

積んだ石の仕切りが残り、

炭と草に支配された場所。

「ただいま。」と言っても、

自分の声は聞こえなかった。

ここには何も無い。

誰も居ない。

それから何かに誘われるように
足が自然と北へ向かう。

村の外れ、防風林を超えた先は、
島の南北を隔てる巨大な海崖^{かいがい}。

その崖には山刀の刃のように尖った
大きな自然岩が切り立つ。

天に住まうへアラズ^ゝの神々に、
見つけやすいようにする為の標。
墓標。

岩の足元に、小さな石が
いくつも積まれている。

これまでに死んだ者の肉体の記録。
ヨエルは墓標の前で跪^{ひざまず}いて、
両の手のひらを天に向けた。

へアラズ^ゝの神、導きの教理。

「我が祖父・ザアク、我が弟・ペラ。」

〈アラズ〉の元に着いた祖父に、

狩りでイノシシに太ももを刺された弟の魂が、
たどり着くように導く。

祖父は赤髪に白色が混ざった時に病で死んだ。

弟は赤髪のまま赤い血を失い、
顔を白くして死んだ。

母の腕に抱かれ、眠るように弟はひとり旅立った。

「我が父・イル、我が母・ハーナ。」

立派な赤ひげを自慢気によく撫でる父、

長い赤髪をたてくし豎櫛で綺麗にまとめていた母。

ふたりは真つ黒なすす〈煤まみれ〉となつて、
変わり果てた姿で死んだ。

「ネレ、イタラ、ホンカ、ヒル…。」

親しい幼なじみたち、その家族、

村のみなから祝福を受けた赤子、

弟妹のように愛しかった人たち、

兄のように頼もしかった人たち、

姉のように優しかった人たち、

父のように逞たくましかった人たち、

母のように情深かった人たち、

祖父母のように賢かった人たち。

思い浮かぶ限りの名前を挙げる。

自分が埋めたすすへすす煤すすまみれすすの、

変わり果てた姿の、

思しき人たちの名前を挙げた。

彼らの名を挙げ、導けば、

早くへアラズズの元にたどり着ける。

(アラズはどこにあるのか。)

幼き頃にヨエルが父母に尋ねた疑問。

目に見えないどこか遠くの空の果て。

取り残されたヨエルの、行ったこともない場所。

(祝詞のりはへアラズズにまで聞きこえてるのか。)

魂たまが旅立つ理。

導きの祝詞のり。

(オレがやっていることは何だ?)

ヨエルには、生き延びたひとりだけで、村の人たちの魂すべてを導くことができるとは到底思えなかった。

(人と獣に、何の違いもありはせんのか。) 屠^と体の足で、山刀の血を拭って

上げる祝詞^{のりと}と変わらない。

村の人たち全てを導く。

その荷がヨエルに重くのしかかる。

「オレはなんで生きてる…。」

海崖^{かいがし}から吹き上がる風が、彼の耳をつんざく。

墓標は何も答えない。

雪深い森林でひとり、冬を過ごす。

猟師の成人の儀は、14歳の冬に行われる。

この冬、普段は隣に立って狩猟を教える父や、

猟師の大人たちは森林へは近寄らない。

〈ナルキア族〉の獵師には、

ひとりで生き抜く力が必要になる。

ヨエルはひとりで罾を張り、ウサギを獲る。

血を抜き、皮を剥ぎ、塩漬けや燻製、

または雪の中に埋めて肉を保存する。

小屋にはそのための道具が揃っており、

皮をなめし、冬を終えると村に持ち帰る。

長い冬を終える頃に、村では

『土起こし』と呼ばれる火の儀式をする。

古くなった木材を広場に集め、

地面を温め大地に春を知らせる。

大地に眠る蛇が目を覚まし、

〈アラズ〉が生物に魂を与える。

立ち上る大きな煙を見て、

ヨエルは成人の儀は終わりを迎え村に帰る。

しかしその煙は『土起こし』では無かった。

人を焼き、

家を焼き、

村を焼いた煙だった。

〈ナルキア族〉の村はヨエルを残し、

〈煤すすまみれ〉となった。

ヨエルの家に残った、2つ重なった遺体。

大きな父の身体の上に覆い被さる母の身体。

燃え尽きなかった床は赤黒く染まり、

焼けた熱によるのものか、父の胸骨や

母の背中は鋭利に開かれていた。

ヨエルはふたりを墓標へと運び、埋めた。

それから他の遺体も運び、埋めた。

何人もの遺体を、何日も掛け、

何度も運び、何体も埋めた。

遺体を運び、汗を拭った顔は真つ黒になった。

魂を失い炭化しきっていない遺体の内部に、

蠅ばいばいが集り、蛆うじが湧く。

屍肉食の鳥が群がり、野犬が吠える。

獸の屠体にも起こる肉の腐敗が、
人の遺体にも起き始めていた。

(魂が荒れる！)

ヨエルは焦った。

肉体の腐敗は魂の荒廃を意味する。

炭となった柱に留まり遺体を狙う鳥たちを、

小屋から持つてきた槍で追い払う。

遺体を掘り返す野犬が来るので、村の周囲に

罾を掛けて獣たちを近寄せないようにした。

(オレがやっていることは何だ？)

真つ黒な顔のまま、埋める前の

真つ黒な遺体を見下ろす。

魂を失った肉体は土へと還る。

土へ還るべく肉体は魂が荒れ、腐っていく。

その光景は狩った動物たちと同じだった。

内臓を埋めれば虫たちが食い、

土を掘り返して獣たちが食う。

血抜きしなければ、屠^と体は腐る。

腐れば、やがて土へと還る。

人間も傷口を消毒しなければ、

毒が巡り、肉は腐り、魂が荒れる。

父の教え、祖父の教え、〈アラズ〉の教え。

(腐ることは……つまり魂が荒れることなのか。)

肉体を失った魂は、〈アラズ〉へ旅立つ。

しかし魂は旅立たずに荒れたことで、

遺体は魂と共に腐っていき、

動物たちと同じく土へと還る。

(じいちゃんをどうして埋めるのか。)

祖父が死んだ時、埋めた時に抱えた疑問。

ずっと抱えていた疑問の答えを目の当たりにし、

否定しようとして弱々しく頭を振った。

察してしまったヨエルは、

無力感に囚われ立ち尽くす。

猟師として成人したヨエルは取り残され、

ひとりで生き抜くしかなかった。

肉体を失った魂はみな、大地を離れると

〈太陽神クサン〉と〈月神クリエム〉に迎えられ、

4年掛けて〈アラズ〉の神々の元へたどり着く。

導くものが多いほど、その魂は早く

〈アラズ〉の元に着くとされる。

開祖が悟った〈アラズ〉への導き。

(キルスの母親は、

遺された父親と子どもたちによつて

きつとすぐにたどり着くだろう。)

悲しむ『ご主人』の姿を見た。

(狩ったシカやウサギは何年掛かるんだ。)

習慣となった祝詞のりことを漫然と唱える。

狩った者しか彼らに祝詞のりことは唱えられない。

(父や母は、焼かれた村の人たちは、

何年掛かるんだろうか。)

ひとりでも何度も何度も同じ祝詞のりとを唱える。

〈アラズ〉の居場所を知らないヨエルが、

魂など導けるはずもなかった。

(誰にも導かれないオレはどうなる。)

自問自答が続く時、

不意にヨエルはつばを飲んだ。

「痛くても泣くな。

悲しくても泣くな。

泣きたくなったらつばを飲め。

涙はこぼれず腹の中の瓶に貯まる。」

父の言葉を思い出す。

顎あごを親指で撫でて、父の仕草を真似る。

祖父が死んだ時の、父の教えだった。

弟が死んだ時の、父の教えだった。

失った家族を思い出すほど、つばを飲んだ。

妻を失ったハンヌの姿を見た。

身体の大きかった彼の瓶は、

ヨエルよりも小さく脆かった。
涙が出ないようにつばを飲む。

父の教えは嘘だった。

どんなにつばを飲んでも、

涙がこぼれて止まらなくなる。

つばを飲めば飲むほど、

我慢すればするほどに、

涙は腹の中の瓶に溜まって、

どうしようもなくあふれ出る。

こぼれ落ちる涙を、

天に向けた手のひらで拭った。

拭つても止まらない涙に、

顔を伏せて拭った。

腹の中の瓶が倒れると、

涙はとめどなく流れた。

満月がヨエルの姿を照らす。

仰向けになって、時折吹く風と

冷たい地面がヨエルの身体の熱を奪っていく。

(このまま眠って、冬になって雪が降れば、

村の皆と一緒に春を迎えられるんだらうか。)

静寂の中で目を閉じる。

(『土起こし』が、大地と共に

みんなを起こしてくれるんだらうか。)

死を前にした時、

生きる意味が分からなかった。

死の恐怖から村を離れ、森林の小屋へと逃げた。

〈サンクラ〉へ皮を売りに行く満月の日は、

その前に〈ナルキア族〉の村で魂を導く。

小屋で漫然と生きているヨエルは、

鞭打たれる奴隷の姿に今の自分を重ねた。

地面に足枷かかせされた肉体。

鼻から冷たい空気を吸い込むと、

ツンとした香りが鼻腔に残っていた。

それが今日あったことを思い出した。

金の鐘よりも澄んだ声を、

雷鳴のような勇ましさを、

月ほど美しい金髪を見た。

（〈月神クリエム〉がキルスに嫉妬し、

〈太陽神クサン〉から彼女を

隠そうとするんじゃないか？）

酒に酔った母は、父への惚気け話を良くした。

キルスは〈中央〉で学士をしており、

とても賢かった。

ヨエルが獵師であつても嫌がらず、

〈ナルキア族〉であつても対等に接した。

祖父母のように様々な知識があり、

島や大陸の色々なことを知っていた。

大人たちが好んで食べる鳥の砂肝を

初めて噛んだ時の、あの心地よい食感を

口の中に思い出す。

ヨエルはその懐かしさに

何度目かのつばを飲んだ。

それから深く息を吐くと、

胸の中の熱が消える。

暗闇が彼を包む。

(うっ！)

突然、ヨエルは腹部に重しを感じて息が漏れ出た。

2本の獣の足に乗りかかられた。

(野犬か、オオカミか。)

その顔を見てやろうと思ひ、

目を見開くと見覚えのある銀毛のキツネであつた。

黒い鼻面に、月光により毛先が銀色に反射する。

——はらへつた。

「なんだ、おめえ…。」

オレを食いに来たのか。」

キツネの月のような金色の目が

ヨエルを覗き込む。

——お主なんぞ食わん。

——わしは美食家じゃぞ。

——悪食の犬ころと一緒にするでない。

ヨエルは思わず鼻で笑った。

目の前のキツネに不味い肉だと言われて。

銀毛に包まれ身体が、

地面に奪われたヨエルに熱を戻した。

キツネのものか自分のものか、

澄み渡っていた鼻腔が獣臭に満たされた。

——シカの次は鳥が良いの。

「鳥だつて？」

ヨエルにとって野鳥の捕獲は難しい。

——鳥じゃ、鳥。

——美食家じゃからの。

「なんだそれは。」

——胸肉を煮込んで味付けし、

——溶いた卵で包むとよい。

——脂身のあるもも肉を香草と焼くのもよい。

——砂肝に塩を振って焼くだけでもよいが…、

——やはり香辛料が欲しいの。辛めのやつじゃ。

——卵も欲しい。

やかましいキツネが前足でぴよんぴよん跳ねる。

「重いからやめろ。」

——失礼なヤツじゃ！ わしは重くないわ。

痩せ細ったキツネは抗議に繰り返したが、

すぐに疲れて前足を折りたたんだ。

——はらへったのう。

「おめえ…。」

——なんじゃ。

「名前は？」

——なんじゃ？

キツネは小首を傾げる。

「名前だよ。名前はあるのか。」

このおしゃべりキツネを黙らせるのに、

いつまで経っても名前が無いでは不便だ。

——メイじゃないのか。お主が付けた名じや。

「めー……」

自らの訛りと、キツネの勘違いにより、
変な懐かれ方をしてしまったと気づいた。

——もとより名はない。

——そうじゃ、お主の名を聞いとらんかったの。

——それで鳥はいつ獲れる？

——有精卵を食う趣味はないぞ。

——卵は鮮度が大事じゃ。

「……ヨエルだ。ヨエル・ケシン。」

——ジヨエル。

「ジヨ、じゃない。ヨエルだ。」

銀毛のキツネが呼んだ名は、

〈南部港キアン〉の訛りがあつた。

〈南部港キアン〉は島の南側の

唯一の港で東西が入り乱れる。

（銀毛なら、東の訛りか。）

キルスが言うには銀髪はヘクレワの民、

島の東部の〈ヤート国〉に当たる。

——ニヨエル。言いくいのう。お主の名は。

——ギヨヘル。シヨベル。ゴベブ？

「もういい。なんでも。」

原型を失いつつあったので、

ヨエルは妥協に妥協を重ねた末に諦めた。

身体を起ここし、村の入口まで戻る。

持ち上げた背囊はいのうは、やはり重かった。

「キツネは荷物を運べたりせんのか？」

——わしを牛馬と一緒にするでない。

（オレを犬ころと一緒にするヤツが…。）

——お主は獵師失格じやな。

——目が悪い。

「まあ、そうかもしれん。」

やかましいキツネと一緒に小屋へと帰る。

キルスが言うには、羊飼いは犬と過こすという。

(キツネと過ぐす獵師は…たぶん、

どこにも居らんだろう。)

ヨエルは自問自答した。

08 なめしとにかわ

塩を塗り込み保存していた

シカの毛皮を広げて、水で塩を洗い落とす。

毛皮に腐敗は見当たらない。

ヨエルは大きい川まで行き、

腰の丈ほどある丸い岩の上に

シカの毛皮を広げた。

毛皮の裏面についた肉と脂を山刀で削ぎ落とす。

『なめし』前の『脱脂』の工程。

首の周りは赤く肉と血の塊がこびり付き、

背中から腹に、皮全体についた白い塊は脂である。

刃に肉と脂がこびりつく度に拭い落とし、

脂肉を失った皮は次第に薄くなる。

こうして皮から肉と脂を削ぎ、真皮しんぴの状態にする。

皮を毛の面まで彫って傷つけてしまわないよう、

刃の腹で慎重に、そして力強く削っていく。

シカの背中となる皮の中心は厚く、

腹回りとなる皮の端は薄く柔らかい。

箇所によって力加減を変える。

イノシシに比べると脂が少なく皮は薄いので、

作業量は減るが慎重さが求められる。

刃を皮の上で走らせる。

音を立てて小気味よく削る。

伸びる皮とこびりつく脂を相手に、

力加減が難しい中、慎重にひたすら削る。

塩での保存時と同様に、

雑な仕事をすればその分、

質の悪い皮が出来上がる。

この作業だけで決まって一日仕事となる。

熟練の猟師であっても、脱脂の作業は

時間を掛け、丁寧に脂肉を削る。

しゃがんで曲げっぱなしの背中が凝り固まり、

伸ばした時には血管が広がり

全身に血がめぐるのが分かる。

脂肉の臭いを嗅ぎつけた蠅が集る。

羽音が耳の横を通る。

ヨエルの汗を目当てに首筋を歩く。

(虫など気にするな。仕事に集中しろ。)

祖父も父も、平然とやってのけた。

こうした仕事が、村の生活の一部を支えた。

大人の大変さを知り、

成人となったヨエルであった。

「があー！」

しかし我慢ならず蠅を手で追い払った。

脂肉を削ぎ終え、

毛についた脂を石鹼で洗い落とす。

ヨエルは脱脂の作業を始める前に、

やっておいたことがある。

町で買ってきた

白色の小石の山と脂身のような薄紅色の塊。
ミヨウバンと岩塩。

『なめし』の工程で必要な枯礬こばんは、

白色の小石、ミヨウバンから作る。

まず砂利のようなミヨウバンを砕いて粒状にする。

ミヨウバンは粉にして止血や鎮痛薬として、

また脱臭にも使われる為、

どこの町でも売られている。

粒にしたミヨウバンを倍の量の水と混ぜる。

鍋に火を入れ、お湯に溶けたら

しばらく沸騰させる。

沸騰させた鍋を大きい川に浸して冷やす。

するとミヨウバンから枯礬こばんの結晶が出来上がる。

安くて便利なミヨウバンも、

ひと手間掛かければ枯礬こばんが作れる。

こうして脱脂した皮と枯礬こばんを小屋に持ち帰る。

夕方に小屋へ戻り、次は『なめし』工程に入る。

次に岩塩と枯礬こばんを同じ量だけ砕き、

再び粒状にしてお湯に溶き

今度は常温に冷ます。

真皮しんぴを煮ると別のものができてしまう。

——『にかわ』を作るのかと思うた。

小屋で寝ていたキツネが起きた。

(このキツネは何かと詳しい。)

『にかわ』なら適当に切り落とした

端切れの皮でも作れるからな。」

——そうじゃ、鳥を煮こごりにせよう。

——鳥はまだ捕まらんかいのう。

首だけ起こしたキツネだが、立ち上がると

そわそわして回りだしてまた寝た。

「鳥好きなやつだ。」

(このキツネは何かと詳しい。)

真皮しんぴを煮れば『にかわ』なる。

真皮しんぴを煮た湯は薄い土色になり、

皮や毛などのゴミを取り除いて冷やせば

液体は固まり『にかわ』が完成する。

『にかわ』は職人の接着剤として、また

腸詰めやチーズなどにも幅広く使われる。

煙突にこびりついた煤すすは火災の原因になるが、

削ぎ落としてにかわと混ぜれば墨へと活用できる。

肉と混ぜればキツネの言う煮こごりに変わる。

魚の皮などでも簡単に作れるので、

質の良いものはどこでも多く売られている。

なので猟師はあまり『にかわ』を作らない。

冷ました液体の中に毛皮を入れ、

木の落し蓋をして皮全体を漬ける。

液体に漬けた毛皮は毎日揉み、

液を混ぜて全体にくまなく浸透させる。

攪拌かくはんを怠ると液体が腐り、毛皮ごとダメになる。

この作業を一週間ほど続ける。

そして取り出した毛皮を乾燥させる。

この時点で毛皮は変質して腐らなくなる。

乾燥させると樹皮のように硬くなるので、

湿らせ、木の棒を使つて引つ張り、皮を伸ばす。

また乾燥させ、湿らせ、伸ばす。

この繰り返しによって、

皮は柔らかく丈夫な素材の革へと変化し、

『ご主人』に売れる商品となる。

——大変じゃあもう。

作業が一段落すると

何もしていなかったキツネが、

台に前足を置いて呑気に言う。

キツネが声にして言っているわけではない。

キツネの鳴き声も聞こえない。

かと言つてヨエル自身の魂が荒れたから

聞こえるというわけでもないし、

妙な確信があつた。

「ミヨウバンが無かつた時代は、

「噛んで唾液でやってたんだと。」

——そうか、そりや大変じゃのう。

——皮では腹は膨れぬでな。

(なるほど、死活問題だ。)

キルスの言っていた言葉を思い出す。

——それでお主、めしはまだか。

——はらへったんじゃが。

——シカは飽いた。

居候いそうろうのキツネがまくし立てる。

やせ細っていた銀毛のキツネだが、

毎日の鹿肉でずいぶんとふつくらとして

毛の質も良くなったように見える。

「へフアタ」の粉を伸ばして麺にして

キツネの肉でも入れるか。」

——お主に期待したわしがアホウじゃった。

——アホウはお主じゃ。

前足で台を叩いて抗議した。

ヨエルはシカのツノを2つ取り出して、

鋸で手のひらの長さに切り落とす。

——また仕事か。

——お主は仕事とわしのどつちが大事じゃ。

ヨエルは黙ってキツネを見てから、

保管していたネズミの燻製を台に投げ置いた。

「恩には恩だ。」

父の言葉を省略した。

——なんじゃこれは！

——嫌がらせか！

——わしをなんじやと思つとる。

「知らんのか。」

キツネはネズミを食べるんだぞ。」

——んなこと分かつとるわ！

——怠惰たいだじゃ！

——甲斐性なしめ！

すねかじりの居候いそうろうに散々言われ、

キツネは小屋を出て行ってしまった。

ヨエルはネズミの燻製を齧かじって作業を続けた。

根本近くの円柱になったツノを、

縦に鋸を引いて指より薄い厚さの板を切り出す。

当て木をして水平になるように、

直線の2本の長い溝を彫る。

刃が抜けるまで両面から削り、

板に付いた3本の長い歯を作った。

ようやく形が見えてきて、

削りかすを吹いてヨエルは目を輝かした。

たてぐし
豎櫛。

父が母に、婚姻を申し込む時に渡したという。

母はこれをいつも大事そうにし、

赤い長髪を巻いて留めていた。

ただヨエルは結婚などは一切考えなかった。

(キルスの長髪に似合いそうだ。)

そう思い、試しに作ってみたに過ぎなかった。

(初めてにしては上出来だ……)

そのままヤスリで形を整えつつ、

山刀の先で撫でるように丹念に、

細い櫛の歯を円柱に削る。

『脱脂』に比べると折れやすく細かい分

余計に慎重さを求められるが、この作業は

蠅が湧かないのでヨエルにとって気は楽だった。

——ジョエル！ ジョエル！

「ジョエルじゃない。」

キツネが慌ててヨエルを呼ぶ。

小屋に入ると尻尾を追って足元で周り、

台の上に飛び乗った。

「なんだ、なんだ。」

当て木とツノとヤスリが吹き飛ばされる。

今更来てもネズミの燻製はもう無い。

——今すぐ来い。よいのがおるぞ！

——はよせい！ はよ！

太い尾を振ってあわてて走り、

止まっては、後ろを歩くヨエルを急かす。

無邪気なキツネに期待せず、

ヨエルはゆつくりと後をついて行く。

——どうじゃ！ どうじゃ！ お主。

「罨を仕掛けたのはオレだが…。」

キツネが自慢気に見せたのは、

褐色と白色が混じった羽根を持つ中型の鳥。

「キジだ…。」

メスのキジが珍しく罨に掛かっていた。

しかもまだ生きている。

鳥が食べたいが為に騒ぎ立てられ

渋々用意した罨だったが、

早速獲物が引つかかった。

鳥が運良く罨に掛かったとしても

鳴いて暴れて仲間に知らせる為に、

罨を見に行く頃には獣に食われており、

羽毛と骨と血を残した罨の残骸を何度か見た。

メイとヨエルの姿を見て鳥は驚き、

走って逃げようとするが首に掛かった

跳ね上げ式の罨が鳥を逃さない。

罨から脱しようと

羽をばたつかせて暴れる。

——煮こごりじゃ！

——肉じゃ！ いや卵じゃ！

——そうじゃ！ お主、こやつを飼おう！

「そんな余裕小屋には無いぞ。」

（鳥程度を育てるなら、

〈フアタ〉でも食わせればいいが…。）

——いやじゃ！ 飼って！ 飼って！

——卵が食いたい！ シカは飽いた！

——ネズミは嫌じゃ！

——甲斐性なし！

（寝床を圧迫するわがままな居候いそうろうのせいだが…。）

キツネは両足で跳ねて抗議を続けた。

キツネの手柄に少しばかり喜んだヨエルだが、すぐにその考えを改めた。

「静かに。」

ヨエルはキジより更に更に森林の奥を見た。

薄い土色の獣の姿が見えた。

鳥用の罠の近くに、ヨエルは

獣用のくくり罠を仕掛けた。

鳥は獣に自ら餌の場所を教え、

獣を餌に釣られて罠にかかった。

ヨエルはイノシシの皮を頭に被り、

音を立てずに近寄った。

しかし獣もすぐに近寄るヨエルに気づいた。

目を合わせると鼻の根元にしわ寄せて唸る。

(オオカミか。)

——こやまだ子どもかいの。

キツネの言う通り、若い個体だった。

だがオオカミはキツネよりひとまわりも大きい。

——どんくさいやつじやの。

目論見通りに行つたものの、

捕らえた相手が悪かつた。

(オオカミの子どもを狩るな、か。)

猟師の習わしで、頭数の少ない

オオカミの子どもは狩つてはいけない。

また成長すればイノシシやシカなど

獣の敵となり、農作物への被害は減る。

猟師の獲物は減つて危険性は増すが、

猟師の減つた森林が獣であふれることも無くなる。

オオカミが増えればきつと稼ぎも良くなる。

「キジは後だ。」

(またうるさく言われそうだ…。)

——どうするつもりじや。

「オオカミを逃がす。」

だが予想していたキツネからの文句は無かつた。

(逃がすなんて、どうしたもんか。)

そうは言ってみたヨエルだが、

獣を罾から逃がすことなどやったことが無い。

顎^{あご}を撫でてみたものの、

父や祖父がオオカミを逃がす場面を

見たことさえ無かった。

(近くに群れがいないのは幸いか…。)

村でもオオカミに襲われ死んだ者は少なくない。

喉を噛まれ出血で死ぬ者や、

特有の毒によって、魂が荒れて死ぬ者も居る。

若いオオカミは冬毛のせいで、

ヨエルにはとても大きく見えた。

「しかし運が悪いな…。後ろ足か。」

くくり罾はオオカミの後ろ足に掛かっている。

(小屋に戻って、棒を持ってくるか。)

罾に掛かっている自由な前足で

飛びかかられると、牡鹿の時のように

腹に乗って押さえつけるのは難しい。

——イノシシを使え。

黙っていたキツネが言った。

「イノシシ……？」

(そんなもん……)

キツネの言った意味が途中で理解でき、
被っていたイノシシの皮を脱いで左腕に巻く。

前足が自由なオオカミは

近づいたヨエルの喉笛に噛み付く為に、

予想通り飛びかかった。

オオカミの前足を、

ヨエルは左腕のイノシシの皮で防ぎ、

さらにその口に毛皮を突っ込んだ。

唸り声を上げ懸命に首を振り、

オオカミは罠に捕まった今でも

相手を殺し、食い、生き延びようとす。

ヨエルの腕の骨を砕きかねない咬合力で、

オオカミは3重に巻いた

イノシシの厚い皮に噛み付いて離さない。

尻から倒れたヨエルだが前腕で押し返し、

オオカミを横倒しにして腹を跨ぐと、

なんとか体ごと押さえつけた。

(こりやシカよりも大変だ。)

危機からなんとか脱し、大きく息を吐いた。

自由な右手で山刀を腰の鞘から抜き、

罨にかかった膝を手のひらで抑えて

刃の先で足首の縄を切った。

それからゆっくりと立ち上がる。

オオカミは警戒心を緩めず、噛み続けた。

ヨエルはオオカミの目を見続ける。

もし目を逸らせば、相手が怯んだと見なされ

さらに別の箇所を噛みつこうと狙ってくる。

前脚を罨に掛けたイノシシに油断した、

弟の死を思い出してつばを飲む。

罨の場所からすり足で少しずつ離れ、自由になったことを気づかせる。

しばらくするとオオカミは

相手に敵わないことを認め、嘔むのを諦めた。

後ろ足が自由になると知ると、

尻尾を向けて走って行った。

——あんなどんくさくて生きて行けるんかいのう。

(小屋の前で寝てたヤツが…。)

その言葉を飲み込んで、黙ってキツネを見た。

(メイのおかげでなんとかなったな…。)

イノシシの皮を巻いた腕は、

嘔まれた部分が赤くうっ血していたが

傷は見当たらず無かった。

——あー！ わしの卵！

オオカミはキジを唾えて首を千切り、

木々の向こうへ消えてしまった。

(どんくさいキツネも居たもんだ…。)

口に出すのは止めた。

09 折られた枝

元気になったメイは普段

森林の罨を巡回しているか、

小屋で寝ていることが多い。

——あのどんくさオオカミめ。

——あれはわしの鳥じゃぞ。わしの卵じゃ…。

(まだ根に持つてるのか…。)

オオカミにキジを奪われたことが悔しいらしく、

まだ鳥を諦めきれないメイは森林を見回る。

——お主…。

——こやつは食えんヤツじゃ。

ムジナが罨に掛かったことを知らせたが、

メイは鼻の根元に深いシワを寄せて

歯茎を剥き出しにする。

ムジナと呼ばれる穴に棲むいくつかの種を、

猟師たちは揃ってムジナとまとめてしまう。

それには決まってひとつの理由がある。

ムジナは肛門近くに臭腺を持ち、

強い臭いで自分の占有域を主張する。

占有域はムジナの繁殖に有利となる。

野生動物は多くは食性や個体によるが、

ムジナの肉は食えないほどに決まって不味い。

ヨエルも成人の儀の最中に仕方がなく食べた。

血抜きして沢で肉を冷却して処理しても、

茹でた途端に湯気が異臭を放ち、

鍋を小屋から追い出して雪の中で食べた。

硬い肉を口に入れた瞬間、

得体のしれない臭いが鼻から抜け出すと

一時的に嗅覚を失った。

触れた舌と頭が肉を毒か排泄物と判断し、

胃が拒み、途端に全てを吐き出した。

一緒に煮込んだ根菜さえも臭いが付き、耐えきれず捨てることになった。

(食べもん粗末にすんな。)

父の教えはムジナが対象ではなかった。

それからしばらく小屋の寢床は、

ムジナ肉の臭いがまとわりつき

寝付けなかった。

猟師がムジナと呼びまとめる理由が

身に沁みて分かった。

——そんなヤツ埋めてしまえ。

そのため、メイは容赦なく言った。

——ネズミのがまだマシじゃ。

——ネズミは食わんぞ。

メイは言っておいて否定する。

「キツネもこれは食わんのか。」

——わしは美食家じゃ！

——ゴミは食わん！

「ひどい言われようだな、こいつは。」

目の周りは煤色すすだが、

白色の毛が顔に混じる。

全身は金に近い土色で、毛皮はよく売れる。

ゴミ呼ばわりの肉は仕方なく埋める。

ヨエルも過去に酷い思いをしたので、

二度と食べたくは無かった。

——こやつは農家の敵じゃ。

「キツネもそうじゃないか。」

——お主はのう…。

メイは冷めた目でヨエルを見つめた。

農家にはどちらも害獣であり、

特に繁殖力の高いムジナは

猟師にとつて『なめし』の良い練習台になる。

——ウサギは良いのお。

メイはウサギを好んだ。

村の弟妹たちも、ウサギの飼育を
好んだのをヨエルは思い出す。

(愛らしい姿じゃなくて…。)

——煮てよし、焼いてよし。

「だよな…。」

予想が当たり、ヨエルは頷いた。

主に食に關してメイは人よりうるさい。

ウサギの皮は剥ぎやすく、

肉は手軽く調理できる。

癖がなくさっぱりとした味や肉質も

鳥に近く、なによりメイの小言も少ない。

出来上がった毛皮に触れると、

細く柔らかな冬毛に手が埋まる。

ヨエルのニヤつく姿が、

メイに見られていた。

メイは何も言わずにその場を去った。

——イノシシは子どもが良いの。

若いイノシシを捕まえた時にメイが言った。
濃い土色の毛色であるが、

その体格はメイよりもやや大きい。

後ろ足を引つ張り、逆さに吊つたイノシシの
つぶらな瞳が助けを求めているように見える。

(愛らしい姿じゃなくて。)

——肉が柔いでな。

(だよな。)

ヨエルは黙って頷いた。

イノシシは子どもであっても捕まえたら肉にする。

オオカミのような訓話も無い。

イノシシやシカは肉の癖がやや強い。

ただし若い肉ほどその癖は控えめになる。

外敵のオオカミが少なくなつた森林において
繁殖能力の高さでイノシシは特に増えやすく、
餌が無ければ人里に降りて暴れる害獣になり
太い牙を刺して人を殺すことも少なくない。

イノシシは硬い毛が多く『なめし』の段階で
漬け込みが甘くなつてしまい、

枯^{こぼん}髻の液体が腐敗して失敗したことがある。

『なめし』の前段階で石灰水に漬ければ

脱毛もできるが、商品として買われなくなる。

冬の寒さ厳しい〈中央〉などでは

『ご主人』曰く、毛付きが売れる。

石灰を買う金も、運ぶ時間も惜しい。

シカに比べるとイノシシは皮下脂肪が厚い。

体格が大きければ皮の面は増え、

『脱脂』の作業も比較して多くなる。

ちゃんと『脱脂』出来れば厚い皮になる。

もちろんちゃんと出来なければ

皮は腐つてダメになる。

革になると軽くて頑丈な素材として、

脱毛して染色などをすれば、

丈夫な靴や鞆などで活躍する。

抜かれた毛は刷毛などに限なく流用される。

父の作ったイノシシの毛皮は

オオカミに噛まれたものの、

非常に丈夫に出来ていて

猟だけではなく寝床でも活躍した。

メイとは共に飯を食い、

暖を取れるので寝床も共にした。

寝床を占領されている時が多かったが。

——お主、わしの尻尾によどかけおつたろう。

寝起きざまにメイが騒ぐ。

——尻尾が濡とる！これが証拠じゃ！

そう言つてメイは濡れた箇所を鼻先で嗅ぐ。

吊つたイノシシの肉を解体する作業の最中で、

昼から寝床に入るどころではないヨエルは

寝ぼけたキツネから言いがかりを受けた。

よだれの匂いを嗅いだ後、

メイは静かになつてまた寝床で丸まつた。

「おい。証拠とやらはどうした。」

ヨエルがひとりで寝ている間に、寝床に入ってきたメイの後ろ足で顔を蹴られることがよくあつた。

翌朝その件で訴えたところ、

——わしはそんなことせぬ。

——証拠不十分じゃな。

——お主の言いがかりの冤罪えんざいじゃ。

——早急に詫びよ。

——寛大なわしは鳥で許そう。

とまで言われた。

「また鳥か。」

鳥はあれからまだ捕まっていない。

——良いか？ 香辛料じゃぞ。言うてみ。

「ハ——しんりお。」

ヨエルは固いパンを水に浸し、

少しふやかしてから食べる。

(水の味がする…。)

——お主の料理には刺激が足りぬ。

——辛くて肉に合うやつじゃぞ。

——わしは美食家じゃからの。

——辛すぎるのはダメじゃ。

——わしは辛いのは苦手じゃからのう。

(どっちなんだ…。)

〈サンクラ〉の町へ行く日になると、

メイはいつものようにヨエルの料理に小言を言い、

またいつものように朝食を綺麗に平らげる。

——今日は見回りは無しじゃな。

そしてヨエルを見送ることもなく、

普段どおり寝て過ごすのは想像に容易い。

それから焼いたパンを半分に切り、

厚めに焼いたイノシシ肉を中に詰める。

脂が固まらず中に染み込むので持ち歩け、

なおかつメイが起きた時の昼食になる。

そんな準備もあつて、出発は結局

以前と同じく昼前になつてしまった。

(村にはまた夜になるか…。)

ヨエルは毛皮を詰めた背囊はいのうを背負い、

森林を歩く。

メイが頻繁に罾の様子を見に行くので、

ヨエルは解体と脱脂などの作業に多く集中できた。

そのため今月は背囊はいのうから毛皮が少しこぼれている。

(これで『コーしんりお』をか買えるのか?)

森林を抜けて畦路あぜみちに出る。

〈フアタ〉はすでに刈り終わり、

何もない田が秋の深まりを感じた。

それからいくつかの畑は

獣に荒らされて放置されていた。

振り向くと〈煤吹山すすふき〉の麓にある〈禁域〉や、

ヨエルの過とごす森林は紅葉に染まっている。

黄色に色づく畦畔林けいはんりんの農道を歩くと、

笛や太鼓など高い音、

低く大きな音などが町から響く。

『収穫祭』が行われている。

農家は実りに感謝して秋の別れを惜しみ、

冬備えをして来年の豊穰を願う。

空に色鮮やかな黄色の煙を伸ばして

〈アラズ〉の神々に知らせる。

(『土起こし』みたいだな。)

ヨエルの住んでいた〈ナルキア族〉の村でも

春の『土起こし』と同じく

秋にも似た冬の平穩を願う祭りがあつた。

そしてそれは成人の儀の始まりでもあつた。

(あれから1年経つたのか…。)

家族と別れ、村のみんなと別れ、

森林の小屋でひとり、冬を過ごす。

あれほど鮮明だった冬の間の記憶は、

1年が経てばおぼろげになっていた。

イノシシの皮を渡した父の顔も、

背囊はいのうを作った母の顔も、

ヨエルは〈煤すすまみれ〉の記憶で

黒く塗りつぶされてしまった。

そんなことを考えていても、

ヨエルが〈サンクラ〉の町に入れば

子どもたちにいつものようにからかわれる。

人々はそれぞれ黄色に染めた服で着飾る。

屋敷の裏門に吊るされた金色の鐘を鳴らす。

庭には落ち葉が散って積り、

冬を前に手入れがされていない。

「はい……。」

少し遅れて、キルスの声がした。

使用人でも、『主人』のハンヌではなかった。

(魂の荒れた主人はどうしたんだ。)

ヨエルは最後に見た彼の後ろ姿を思い出した。

裏戸から出てきたキルスは

初めて会った時とは少し違って、

別れた時のように表情に陰りが見えた。

黄色の大きな外套を着て、

白い顔は少しやつれて見える。

金の髪は縛っておらず、やや乱れている。

「ああ…、ヨエルさん。」

ヨエルの顔を見て、一瞬目を見開き、背けた。

駆け寄って落ち葉の上で彼女は突然ひざまず跪いた。

「どうしたんだ？」

「ごめんなさい。ヨエルさん。」

両手を交差させて肩に手のひらを乗せると、

キルスはヨエルの膝位置まで深々と頭を下げた。

何が起きたのか分からないヨエルは、

同じようにひざまず跪いて、右の拳を左肩に当てて

会釈を交わす真似事をした。

「ヨエルさんの村が、

〈煤まみれ〉になつたことを知らずに…。

わたくしは恥ずべきでした。」

「そんなこと…。」

知らないことを責めるつもりは

ヨエルには無かつた。

元より交流の薄かつた小さな村が

〈煤まみれ〉という厄災で消えたことは、

〈サンクラ〉の町で知る人は多くなく、

忌むべきことと口を噤む者ばかりであつた。

その為に、キルスがヨエルの村ことを知つたのは

〈中央〉から町に戻つて来てしばらく後となつた。

ヨエルのことを知らず、キルスは取引をしていた。

いつまでも頭を上げないキルスに、

ヨエルは小さく震える細い肩に触れて

起こそうとした。

しかしキルスは頭を強く振つて拒んだ。

「わたくしは、残酷ことをあなたに…。」

彼女はさらに頭を下げ、

ついには地面に伏せてしまった。

事情が分らないヨエルは困りきって、

キルスの肩から力なく手を離した。

「…今日、持ってきていただいた皮は、

我が家ではもう買えないのです…。」

「え…?」

「先月の皮も、先々月の皮も、

本当は買えなかったのです…。」

「何が…?」

(何を言っているんだ。)

ヨエルはお金は受け取った。

キルスから覚書の値段で彼はお金を受け取った。

それよりも安い値段で『ご主人』にも彼は売った。

彼は夏からずつとこのフィン家に皮を売ってきた。

「お父様は…、

ハンヌは知っていたのです。

知っていて…。知っていて、

あなたから買っていたのです。」

弱々しい声で、キルスはヨエルは顔を見た。

許しを乞う為に、顔を見上げた。

「この家に、皮の販路など無かったのです。」

キルスの言葉によろやく、ヨエルは頷いた。

「んな革あ売れやしねえんだ！」

『ご主人』ハンヌがそう叫んでいた。

「お父様は、農民にお金を貸していました。

いくつかの〈サンクラ酒〉の製造所にも…。

返る見込みのない大量のお金だったんです。

獣害による農作物の不作と、

〈正統聖教〉による酒の禁止により、

『収穫祭』を前に夜逃げが相次ぎました。

大きな借金を抱えたまま、お母様さえ失い、

お父様は誰にも言えず…。」

〈中央〉から帰ってきて間もない学士のキルスが

いくら算術に長けていても、農家へ温情で貸した『見えない数字』までは把握できなかった。

「ご主人はまだ治らないのか。」

「…お父様の魂は、静まることなく、

〈新生聖教〉の保養所へ…。」

キルスは再び顔を伏せた。

ハンヌがここには居ないことを示す。

「〈正統聖教〉とか〈新生聖教〉って？

〈アラズ〉じゃないのか？」

大陸から伝わる神々の名を〈アラズ〉と呼ぶ。

〈聖教国ゾーン〉の開祖が悟り、

ヨエルの住む〈ケーク国〉に信徒が布教した教理。

「〈ケーク〉は〈新生聖教〉と

〈正統聖教〉に教派が別れます。

〈中央〉を含む東部を〈新生聖教〉。

我が家も〈新生聖教〉でした。

南西部の小さな教派だった〈正統聖教〉は

冬に勢力を強め、この〈サンクラ〉の町も配下になりました。」

ヨエルにとって難しい話でも

キルスは手頃な落枝を折り、

島の南西部を描いて教えてくれた。

〈ケーク国〉は2つに分かれ、

首都〈中央〉を含む東部が〈新生聖教〉、

崖沿いの西部が〈正統聖教〉に囲まれる。

「アラズ」の教理には島の土地や民族で、

教派によってその戒律が設けられます。」

「戒律?」

「民衆に教え広めるための教理とは別に、

信徒が守らなければいけないことです。」

(大陸と島みたいに土地で国が別れたのと同じで、

〈新生聖教〉と〈正統聖教〉に別れた…)

同じ〈ソーンの民〉で同じ教理なのに、

教派が別にあつて、戒律が異なる。)

島の端の村で暮らしていたヨエルにとつて、それは理解し難い感覚だった。

「冬の戦争で戦功を上げた〈正統聖教団〉は、教派としてそのまま勢力を強めました。

厳しい戒律から生まれた教理は、

怠惰たいたを生み出す酒を禁じ、

穢れを生み出す動物の不殺を唱え、

ふたつに繋がる動物の利用を禁じました。」

「怠惰たいたと、穢れ。」

酒は疲労回復として大人たちに親しまれる反面、

酒によって身を持ち崩す人も居る。

キルスの父親、ハンヌである。

そして穢れは、動物の持つ毒。

イノシシやオオカミなどで負った傷は、

人の魂を荒れさせる。

排泄物の詰まった腸や、

体毛についた毒が血管に巡りつて

内臓や肉の持つ熱により傷みを早める。

穢れは猟師の生活にも深く関わり、

ヨエルにも理解が出来た。

「人に労役という試練を課すこと。

そして疫病をもたらすとして、

動物の利用を一切禁じました。」

「そうなる」と。

ヨエルにも想像に容易かった。

土色と暗い煤色すすの髪をした

〈エンカー族〉の奴隷に引かせた荷車は、

牛馬の代わる労働力だった。

「肉、卵、乳、それらの加工を禁じ、

毛皮や細工の売買に留まらず、

労働の利用さえも〈正統聖教〉は禁じました。

反すれば〈アラズ〉が厳しく罰する、と。」

（〈ナルキア族〉の村は生活できない。）

それはヨエルの想像を超えた。

「そして厄災、〈煤まみれ〉が起きました…。」

想像を超えた事態が、ヨエルの住んでいた

〈ナルキア族〉の村を襲った。

村が〈煤まみれ〉にあつた理由。

厄災の接点が、〈正統聖教〉の戒律と繋がつた。

「コンスお祖父様が築いた

フィン家は終わりです。」

「キルス、さんは？」

キルスは再び首を横に強く振つた。

「わたくしと弟は…、この館を売り、

…〈中央〉に戻つて働きます。」

また学士として働けるとは思えません。」

キルスは顔を上げた。

「…お金を溜めたら、

〈中央〉で商人をやるかもしれませぬ。

お父様や、お祖父様よりも立派な商人として。

そうしたらヨエルさんの皮も買って、

大きな館を建てます。」

震える口で、彼女は下唇を小さく噛んだ。

気丈に振る舞い、

生まれ持った優しきで情けを施すキルスだが、ヨエルにとっては残酷なだけの優しさだった。

それはハンヌの優しさが元凶だった。

〈ナルキア族〉の村の猟師。

〈煤まみれ〉の生き残り。

皮を売りに来た見すぼらしい哀れな子ども。

（売れもせん皮を買ってやり、

情を与え、さぞ満足したんだろう。）

餌えもしない赤い獣を餌付けし、

餌の味を覚えさせた。

人里に降りた

鼻つまみ者の赤い獣を見て笑い、

見世物のように金を渡す。

それだけに留まらずキルスの温情によって、

彼女はまた赤い獣の前に餌をぶら下げた。

（〈中央〉で皮など売れはせん。）

彼女の言葉を、ヨエルは心中で強く否定した。

（同じ物を他所から持つてきて安く売る。）

それは彼女自身がヨエルに教えたことだ。

商人が、自分で自分の首を絞める行為。

赤い獣は吠えなくなった。

喉に灼けるような熱が込み上げる。

立ち上がり、上を向き、腰に手を当てた。

腰にある山刀の鞘に触れ、

ヨエルは大きく息を吐いた。

自分がまだ獣を狩る猟師であり、

人間ということを認識する。

懐にある紙幣を握りしめて、

キルスの前に差し出した。

岩塩とミヨウバンでいくらか使ったが、

決して多くはない皮を売ったお金。

情けで恵んでもらったお金だった。

「え……？」

困惑する彼女を見下ろした。

キルスは罵倒を受けるはずだった。

〈ナルキア族〉の生き残りに餌付けを施し、

恥ずべき行いをした。

それでも彼女は目の前の人間に許されたかった。

「皮は返さんくていい。

〈中央〉に行つて、何か買えばいい。」

（これっぽっちで何が買えるか分からんが。）

猟師でない彼女のことを考えた。

（岩塩とミヨウバンは買えはせんよな。）

獣を屠^{ほぶ}り、肉を得る猟師として

生きていくわけではない。

そんな僅かなお金を彼女に差し出した。

ただ、ヨエルが今出来るのは、

獣のように叫ぶことではなかった。

畑を荒らし回ることも、

差し伸べられた彼女の柔い手に

噛み付くことでもなかった。

(恩には恩を返せ。)

父の言葉を思い出す。

「今日は、皮を売りに来たんじゃないんだ。」

ぎこちなく片目を閉じて見せた。

キルスが以前やって見せた真似事だった。

ヨエルは背囊はいのうから売れない皮を地面に投げ、

底に入れていた小さな物を取り出して見せた。

脱穀したへフアタの芽のような

乳白色をしたたてぐし豎櫛。

「それは…。」

「うん。後ろ向いて。」

上手く出来てるか分からんが。」

金髪きんぱつのキルスの髪に触れ、

赤髪あかぱつの母の後ろ姿を思い出す。

持ち上げた細い髪に齒を通すと、
豎櫛たてくしは滑らかにそれを梳すいた。

それから髪を束ねて少しねじり、

渦を描いて巻き、櫛を挿し込む。

髪は下に落ちずに豎櫛たてくしで固定された。

「初めてにしては上出来だ。」

初めて作った櫛にしても、

まとめた髪にしても、

見様見真似で上手くいった。

キルスは手のひらで髪に優しく触れ、

ぎこちなく笑って見せた。

(キルスの髪の色は、

母の髪の色と違うけど……)

ヨエルはその姿を懐かしんだ。

キルスは言葉を詰まらせ、涙をこぼす。

彼女は震える口で、吹けない口笛を吹いた。

彼も口笛を吹き鳴らして照れ笑う。

村で過ごしていた日常を思い返す。
ただそれだけのことが、
今のヨエルにとっては嬉しかった。

10 名の無い獣たち

「キルスう！ キールースう！」

子どもの声がした。

「はい。」

キルスの明るく澄んだ声が

館に届き、裏庭に響いた。

裏庭に現れたのはヨエルよりも幼い、

鮮やかな黄色の服を身にまとった少年。

金髪を眉毛と耳の下で綺麗に切りそろえ、

すり足で落ち葉を蹴って遊びながら近寄る。

「あー！ 赤いのししー！」

子どもはヨエルを見るなりいつものように、

指を指して鼻をつまみ、尻を向けた。

ヨエルをからかう町の子どものひとり。

「アークス？」

彼はフィン家の長男で、キルスの弟だった。

ヨエルは今更恥じること無かったが、

姉のキルスは弟の行為を恥じて顔を赤く染め、

丸い頭を平手で優しく叩いた。

「アークスつたら。おバカ！」

「キルスう。お客さんだよ！」

アークスの後をついて

正門から館を回って現れたのは、

黒色の頭巾の集団であった。

「〈正統聖教団〉の……」

それはキルスが言っていた

〈アラズ〉の南西部の教派。

頭巾は頭髪を完全に覆い、

口から鼻の上までも隠して

目元しか見えない。

小男を先頭に、十余名の集団の中に、

筋肉質の大きな影が見える。

明るい翠眼に鋭い目つき。

ヨエルはその目と体格に覚えがあつた。

「ご主人？」

「え？ お父様？」

ヨエルはキルスとアークスの父親、

ハンヌ・フィンをその中に見つけた。

キルスも呼びかけたが彼は何も反応しない。

「とー様！ 帰ってきたの？」

アークスがハンヌの元に駆け寄つたが、

先頭の小柄な男がそれを止めた。

（〈新生聖教〉の保養所へ…）

と、キルスは言っていた。

キルスもヨエルの顔を見て、

嘘は言っていないと示し、首を振つた。

彼女にも状況が飲み込めていなかった。

「今の彼は名もなき信徒です。」

小男が言つた。

その腰には長い剣をぶら下げている。

「貴方は？」キルスが尋ねた。

「我々はこの地を治める〈正統聖教団〉。

私も〈アラズ〉に仕える名もなき信徒です。」

つり上がった小さな目の、

ムジナのような目つきに、

高く濁った声で喋る赤黒い顔の小男。

鎖骨には金色の紐飾りが、顔布と服を繋ぐ。

「我が家に何の要件ですか？」

キルスの言葉を無視し、

小男はヨエルの前に立った。

ハンヌに比べるととても小さく見えたが、

若いヨエルよりも背丈は高く恰幅も良い。

ヨエルは嗅ぎ慣れない香料の匂いに鼻を歪めた。

「お前が〈ナルキア族〉の生き残りですか。」

（？）主人から聞いたのか……？）

自分の境遇について、

ヨエルは誰かに話す方ではない。

唯一ハンヌにだけは皮を売る際に、
事情を説明したことがあつた。

「何か用か？」

「〈煤すすまみれ〉の残り滓かすめ……」

小男は小さな声でつぶやく。

ヨエルはそれを聞き逃さなかつた。

「お前は〈煤すすまみれ〉を見たか？」

「知らん。物を尋ねるならまず名前を名乗れ。

それともオレから皮を買うのか？」

小男の石のように硬い拳が

突然左頬を叩き、ヨエルは地面に倒れた。

頭が揺さぶられ、地面が揺れるようで、

ヨエルはすぐに立ち上がれなくなつた。

「ヨエル！」

「捕まえておけ。あとで尋問する。」

小男の指示でふたりの名もなき信徒が両脇を固め、

お互いが片方の足でキルスの両足を踏んで
全身を拘束した。

ひとりはキルスの父、『ご主人』ハンヌだった。
痛みと共に口の中に唾液があふれ、小石が入った。
痺れた口をだらりと開き、足元にそれ吐き出すと
血と折れた歯であつた。

ヨエルが受けた暴力に、

キルスが白い顔をさらに白くしている。

弟のアークスは彼女の後ろに隠れて恐怖に怯えた。

「私が穢れた皮など買うものですか。」

金毛の皮を落ち葉のように踏みつけ蹴飛ばす。

「私はこの館を譲り受けに来たのです。」

フィン家のお嬢さん。」

「何を仰っているのですか！」

「館の主が〈正統聖教〉に入団する際、

寄付して頂いたのです。」

「お父様は〈新生聖教〉の保養所に入れました。」

お父様の魂は、荒れていたのです！」

「彼の魂は我々〈正統聖教団〉の治療と

聖薬によって治りました。

彼は〈正統聖教団〉へ入団を希望し、

その謝礼を受け取ったまでです。」

「〈アラズ〉の信徒が嘘を仰るのですか！」

「聞き分けのない売女だ。」

キルスの訴えを聞き入れず、小男は唾棄した。

〈正統聖教〉の信徒から出た

キルスに向けられた思いがけない侮辱に、

彼女は目を驚かせた。

「〈煤すすまみれ〉の〈ナルキア族〉から皮を買い、

股を開き、血を流す。売女の戯言だ。

ガキ共々さつさと〈キアン〉に売ってしまえば

良かったのです。」

小男は〈南部港キアン〉の名前を挙げた。

それはヨエルも知る〈ナルキア族〉の子どもが、

口減らしで売られる港町だった。

売られた子どもは奴隷同然で働く。

港に出入りする船の積荷を運び、

身体が売れなければ冬の寒空の下、

壁も屋根もない場所で寝ることになる。

(この館を売り、…〈中央〉に戻って働きます。)

キルスは震える口で〈中央〉へ行くと言っていた。

ヨエルはキルスの顔を見た。

彼女は小男の言葉など歯牙にも掛けず、

フィン家の息女として気丈に振る舞い続ける。

「皮を買うことは〈アラズ〉の教理では

何も問題ありません。〈中央〉も同じです。」

「〈新生聖教〉と我々〈正統聖教〉は違います。」

〈中央〉と南西部では小男の言う通り、

〈アラズ〉の派閥が異なる。

「これは〈アラズ〉の戒律です。」

「あなた方〈正統聖教〉がその戒律を歪め、

勝手に決めつけているだけでしょう。」

「なんです?」

聞き捨てならない言葉に、

小男は拳を強く握り込んで尋ねた。

「あなた方は数字を知らない、

片田舎の名もなき信徒なのでしょう。」

「私を侮辱をするのですか!」

「先に侮辱とやらをしたのはアンタだ。」

左頬を腫らしてヨエルは言った。

ヨエルからの思わぬ口撃に

キルスは口角を上げたが、

次の瞬間、彼は隣の名もなき信徒、

父親のハンヌに鼻っ柱を強く殴られた。

小男が片腕を上げた合図とほぼ同時だった。

「主人……。」

ハンヌの鼻息は荒く、目は血走っていて、

肩で大きく息をしている。

ハンヌは明らかに治っていないかった。

「あなた方〈正統聖教団〉は、

〈ケーロ〉で作られる農作物の量を^ご存知？

「ご自分で食べるパンだけではありません。」

キルスの澄んだその声が、小男を黙らせた。

「〈サンクラ〉の町にも大勢の人が住んでいます。

ですがこの町の生産量では

全ての人を満足に食べさせられません。

誰も飢えないように町の物を売り、

町の外、島の外から色々な物を業者たちが

仕入れてくれています。」

それはキルスの誇る祖父コンスから

繋げてきた商人としての仕事だった。

〈サンクラ〉は〈フアタ〉を播^まき、実らせて、

酒を作り、商人がそれを買ひ、町の外へ売る。

その利益で今度は外から品を買ひ入れ、

店に売り、彼らの生活を安定させる。

買われた皮は加工され、商品として店で売られる。

得た金はなめしの、岩塩やミヨウバンに変わる。

それと同じ、単純な循環がある。

「何も無い所から食べ物は何も得られません。

土地を拓き、土を作り、水を引き、

大勢の人間が食べるだけの作物は

ひとりでは作られません。」

「そんな仕事は農夫が奴隷に鞭打てば良い。」

「簡単な話ではありません。」

苗や種を買うのと同じです。

奴隷を買うお金はどこから出るの？

彼らのご飯は、使う農具は、服や靴は、

薬や治療は、子どもは？」

「幼稚でくだらない質問ですね。

奴隷に子どもは要りません。」

「働き手が増えねば、やがて奴隷は死にます。」

「魂にしか永遠はない。」

時間が経てば、肉は腐り、骨は土に還る。」
ヨエルが口を挟む。

父の言葉。彼らへアラズへの教え。

奴隷は草木のように生えるものではない。

土が栄養を失えばやがて枯れてしまう。

奴隷は髪の色が違うだけの人間だ。

小男の無言の指示で、再びヨエルは鼻を殴られた。

「肉を借り、魂を導く。」

キルスが言う。

「これはへアラズの教えです。」

あなた方もよく知る、開祖と馬の説話です。」

教理に疎いヨエルでも、おぼろげに知っていた。

父が言っていたへ太陽神クサンと開祖の話だ。

「へ太陽神クサン」の試練により、

飢えた開祖は馬を食べました。

開祖にとって馬は相棒で、食べ物でした。

人が動物を食べたために、

罰として飢えたわけではありません。

彼は馬を食べることではしか生き延びる方法はありませんでした。」

〈太陽神クサン〉の課した試練は、

開祖に飢えを与えた。

死を確信した馬は自らの身を

太陽神の炎で焼き、自らの主を助けた。

開祖はその時の悲しみで悟り、

馬の魂を〈アラズ〉の神々の元へと導いた。

「魂が肉体に縛られるのは、

神が与えた人への罰です。

蛇の罪は永遠であり、人への罰は絶対です。

〈ナルキア族〉は教理を正しく理解しなかった。

〈アラズ〉の戒律を歪めんとしていました。」

「それなら…。」

小男の言葉に、ヨエルは喋ろうとして

鼻に詰まった血の塊を吹き出す。

「それなら教えてくれ。」

〈アラズ〉の言う永遠の罪と罰は、

罪無き赤子まで焼くのか？」

蛇に与えた人への、永遠の罪や罰は、

永遠を持たない肉体には関係が無い。

（魂が〈アラズ〉の元に行くのなら、

〈アラズ〉が人を殺す理由が成り立たない。）

「ナルキア族」の罰は平等であり、

それは神々の決めた事です。

お前の疑問は神々への侮辱です。」

「恩には恩を返せ。」

親への恩は子に返せ。

親の罪を子に背負わすな。

親の罰を子に与えるな。

これは〈アラズ〉の教えだ。」

父の言葉には続きがあった。

村に古くから伝わる〈アラズ〉の教えだった。

「さらにその後まで大地に縛られるみたいに、知りもせん蛇の罪を、永遠に続く罰の為に、オレたちはいつまで魂を導けばいいんだ？」

(違う。)

ヨエルは自らの言葉に首を振った。

(誰かが死んだ悲しみも、

遺された人のつらさも、

獣の命を奪うことだつても、

誰も彼も、教理だからやるわけじゃない。)

それはヨエルが親から教わったことを否定する。

(馬を食ったのも、シカを殺したのも、

始まりは罰や教理じゃなかったはずだ。)

ヨエルが森林をひとりで生きるには、

仕方のないことだつた。

(分らないって苦しみや恐怖から

逃げようとする動物の本能が、

そうさせるだけじゃないのか?)

それが墓碑の前で遺された、

ヨエルができるただひとつのことだった。

疑問は彼の中にできたひとつの答えを導き出す。

「肉を借りたから、魂を導くんじやない。

ただ導きたいから導くんだ。

失ったから、悲しいから、

許して欲しいから導くんだ。」

キルスの顔が見えた。

彼女がヨエルに頭を下げたように、

ヨエルが彼女の髪を梳いたのが答えであった。

「〈アラズ〉の神々に祈れば、病や怪我もなく、

〈太陽神クサン〉と〈月神クリエム〉は

冷害も干魘かんぼつも、飢饉ききんさえ起きないと

あなた方は言い切れますか？」

ヨエルに続き、キルスが小男に尋ねる。

彼女の質問は、まるで

〈アラズ〉の教理を疑うものであった。

「お前たちは神をも侮辱するつもりですか。」

「ではあなたの口で答えてください。」

農家は農作物を守るために、

虫やネズミ、多くの小動物を殺します。

食べていく為にそれは仕方がありません。

田畑を荒らすイノシシやシカに

何もできずただ指を唾えて見ていた結果、

どうなったかあなた方はご存知ないでしょう。」

獣に荒らされて放置された畑をヨエルも見た。

「春に〈ナルキア族〉が〈煤すすまみれ〉になって、

今年の獣害は例年以上に深刻化しました。

森林近くの農家は、夜の内に

〈サンクラ〉の町を去りました。

借金を苦に、戒律を破ってまで

首をくくった製造所もあります。

口減らしで子どもを売り、

赤子の首を絞めた親も居ました。」

やるせない思いに、キルスは枝を強く握りしめた。

フィン家当主・ハンスの貸したお金は、

彼らを救うことはできなかつた。

残されたハンスの娘と息子にも影響を与えた。

「毛皮の無い人間は冬を越せません。

開祖のように、飢えをしのぐ馬も居ない。

冬に屋根もない場所度過ごせば、

教理の通りに〈アラズ〉の元に旅立つわ。

誰にも導かれずに。」

「それが〈太陽神クサン〉の課した試練です。

〈正統聖教〉が開祖から受け継いだ教理です。

生まれ持った人の罪であり、

〈アラズ〉の戒律であり、罰です。」

小男の言葉に、キルスは枝を振って否定した。

「その試練に対し、人は家畜を育て、

乳を絞り、保存できる食料を作る。

冬を越せる農作物なんて限られてる。

パンと雪だけで人は生きていけない。」

「何の罪もない動物たちは、

そうして生きています。

人に使われ、殺されなければ

生きながらえた命です。」

「獣たちも草や木の芽や虫や、

他の獣を食って生きとるぞ。」

「動物は人とは違う。」

〈アラズ〉は彼らに罰を与えなかった。

人となった蛇こそが罪を背負うのです。

〈ナルキア族〉はその罰を負ったのです。」

小男はヨエルの言葉を全て否定する。

村が〈煤すすまみれ〉にあったヨエルには、

教理と戒律に縛られた小男に

返せるだけの言葉がもはや見当たらず無かった。

「人の怠惰たいただと穢たいれは〈アラズ〉の戒律により、

拂はらわなければならぬのです。」

小男は〈正統聖教〉の戒律を述べた。
それでもキルスの反駁はんぱくは続いた。

「お酒も動物も、怠惰たいだと穢れを、

損失を生むだけのものじゃないわ。

疲労を取り、冬を越すことが出来る。

生活を豊かにし、繁栄するための知恵で、

肉体を共にする生物と紡いで来た歴史です。

人は奴隷だけでは生きられるほど強くない。

〈中央〉で学んだ算術には、そうした

何気ない様々な物が数字に出てきます。」

「怠惰たいだが人を蝕むしばむのです。

戒律があるからこそ、

人が人として生きられるのです。」

小男は尚も戒律を主張する。

「あなたは何も示せていない。

口減らしの戒律では人は生きられない。」

キルスは肩で息を吐き、

枝の先を小男に向けた。

言葉を無くした小男は、思わず口を噤んだ。

(戒律で腹は膨れない。)

キルスは〈正統聖教〉の戒律を、

小男の前で真つ向から否定した。

「あなた方の道楽を、

わたし達に押し付けないで！」

それから彼女の細い指で、枝を折った。

「穢れた異端者め！」

憤る小男の言葉にヨエルの隣の大男が動いた。

恥辱ちじよくに塗れ赤黒くなった

小男の顔が隙間から見える。

「これは〈アラズ〉が与えた罰である！」

仰々しく言った小男の指示で、

大男ハンヌがキルスの髪を掴み

外套の襟を掴んで身体を持ち上げる。

そして彼女の顔面を石材の裏門に叩きつけた。

説き伏せられるものではなかった。

彼女の言葉は、目の前の獣には通用しない。

獣はただ、相手を屈服させれば良い。

喧嘩でも戦争でもして勝てば良い。

屈服しない相手なら殺せば良い。

そうすることで自分の占有域を得られる。

〈エンカー族〉は奴隷として屈服した。

足枷^{かせ}をして、鞭打たれ、荷車を牽^ひく。

元は田畑を耕し、狩りをする同じ人であった。

海に棲み、大地を飲み込んでいた蛇と同じ。

ただそこに棲み、生活をしていたに過ぎない。

〈アラズ〉は蛇の行いを罪として、

人の姿に変えると鞭を打って試練を与え、

荷車を牽^ひく奴隷のように魂を導かせる。

大地は肉体の足枷^{かせ}となった。

蛇は、人は〈アラズ〉によって束縛された奴隷。

（蛇を屈服させた〈アラズ〉も、

同じ獣じゃないのか。

それは単なる獣同士の、占有域の奪い合い。

〈ナルキア族〉の小さな村で生まれ、

人と奴隷、教派さえも区別のなかった、

境界の曖昧なヨエルがたどり着いた〈アラズ〉。

ヨエルにとって〈アラズ〉という存在は、

魂が向かう場所ではなかった。

目を開けたヨエルは、

夕日の中で赤く染まった外套が

裏門に吊られているのを見た。

歯の折れたたてぐし豎櫛は血に染まり、

足元で砕けていた。

だからヨエルは獣になった。

1 1 臆病な迷い子

キルスは獣に殺された。

顔を潰され、首を吊られ、

異端者として見せしめにされた。

キルスは人として殺された。

泣き叫んでいたアークスは、

剣で胸を貫かれ絶命した。

人の道具によって人として殺された。

人の形をした獣たちにふたりは殺された。

「殺してやる！」

口角から血の泡を吹き、赤い獣が咆哮する。

「全員殺してやる！」

目を潰して！ 耳を千切って！

喉笛噛んで殺してやる！」

殺してやる！

奪ってやる！

食ってやる！

赤い獣は哭ないた。

赤い獣が精一杯の力で吠えた。

黒いの獣たちが目を光らせ、こちらを見た。

身の毛がよだち、立ち上がった赤い獣は

本能のまま振り向いて走った。

小さくか弱い赤い獣が

黒く大きな獣の群れに敵うわけがなく、

赤い獣は吠えて、走って、逃げた。

森林で暮らしていた赤い獣は、

黒い大人の獣たちより早く走って逃げた。

夕日に赤く染まった畦畔林けいはんりんを飛び越え、

枝の隙間を抜け、道なき道をひたすら走った。

しかし赤い獣は酷く傷ついていた。

胸から流れる血が止まらない。

鼻は血で詰まり、時折赤い飛沫が出た。

口で何度呼吸しても、楽にならない。
喉に詰まった黒い塊を吐き出した。

走れば呼吸は乱れ、視界はぼやける。

肺が空気を求め、

心臓を動かし血をめぐらせる。

だがその血は胸からこぼれる。

頸動脈を刺した牡鹿の最期を思い出す。

命を奪うこと、死に慣れることはなかった。

自らに襲いかかる死の恐怖に負けた赤い獣。

赤い獣の背後に死が迫る。

夜の暗闇に覆われる。

力を振り絞って走った。

生きるために走っていた。

生きる理由が分からない赤い獣。

草をかき分け、息を切らし、

ついに地面に倒れた。

見覚えのある場所。

変わり果てた場所。

村の広場。

〈ナルキア族〉の村。

〈煤^{すす}まみれ〉の村。

赤い獣が生まれ育つた場所。

人として生きた場所。

手で胸に触れる。

心臓が脈打ち、肺が上下し、胸に血が流れる。

赤い獣は自分の死を覚悟した。

(キルスが死んだ。)

そのことが悲しくて、

逃げ帰る自分が惨めで哭いた。^な

腹の中の瓶がひび割れ、赤い獣は哭いた。^な

まだ自分の死さえ受け入れられずにいた。

家族や村の人たちの死さえも、

赤い獣には受け入れられなかった。

ひとり遺された赤い獣は、喉を詰まらせ哭いた。^な

(人として、未練があるとするとするなら。)

血が胸を焦がすように熱くなって湧く。

「メイ……」

寝床で丸くなる、銀の毛玉が思い浮かんだ。

——ジヨメル。

「ジヨ……」

か細い泣き声が出た。

情けない声であった。

(ジヨメルじゃない……)

叫ぼうにも上手く声が出なかった。

倒れた赤い獣の胸にメイが乗り、

銀毛を赤い獣の血で染めた。

——どんくさいお主はわしそっくりじや。

——わしはお主ほど、どんくさくないが。

胸の上でメイが前足立ちした。

(重い……)

その重さが、瓶を蓋するようで

赤い獣には丁度良かった。

赤い血に染まった銀毛の間に、

血に染まらなかったメイの胸の傷が見える。

「どうして、ハイム…。」

殴られた左の頬と、鼻の頭が腫れて、

耳に伝わる自分の声が分からない。

——お主がベソかいて呼びよるからのう。

——わしが見に来てやったわけじゃ。

——慈悲深いからのう。

——言うなればお主は迷い子じやの。

(死んだところで誰にも導かれない。)

メイの言葉に赤い獣は鼻で笑ったが、

むせて血のつばがこぼれた。

(言いたいことがある…。)

やり残したことがある…。)

灼けるような喉で赤い獣は声を絞り出す。

「キルス・フィンの魂を…、

〈月神クリエム〉が嫉妬しないよう…、
弟…アークスの魂を、〈アラズ〉の元へ…。」

倒れたまま力なく、血まみれの手を仰向けにして
ふたりの魂を導く。

例え〈アラズ〉が

神々の住まう場所で無かつたとしても、

神々が蛇と同じ獣であつたとしても、

赤い獣は祝詞のりとを上げた。

（ただ導きたいから導くんのだ。）

人であつた自分の言葉を、

赤い獣は最後まで信じ貫いた。

それはただの『願い』に過ぎない。

「メ、イ。」

——なんじゃ。

「オレが、死んだら…、魂を、導いてくれるか。」

——お主は底抜けにアホウじゃの。

「オレはアホ、だ…。」

キツネに、声かけて、餌付けした、アホウだ。」

(ハンヌの餌付けに気づけなかった、

アホウな獣だ。)

——餌付けとはなんじや。

——あれはごはんじや。

——料理じや。

「あと……」しん、りお…

買って、な…。」

——そんなこと。

——甲斐性なしに、ハナから期待しとらんわ。

死の間際まで、メイはいつもどおりだった。

(もう未練は無い。)

赤い獣はそう思った。

「獣になって…。」

——お主はアホウじや。

メイによつて死に際の言葉も遮られる。

——魂はへアラズ」になど行かぬぞ。

——そもそも魂などは存在せぬ。

——存在せぬものが〈アラズ〉じゃ。

——そして〈アラズ〉は神々の場所ではない。

——人が最初にたどり着いた遠い空の三重連星。

——光の速さで4・3年ほどじゃ。

——導きの祝詞のりとなど、音も届かぬ遠き場所よの。

——そのように、すべては理の上にある。

——肉体の束縛も、大地も、すべては理じゃ。

——お主も、わしも理がある。

——分からぬものを、分からぬままにしたもの。

——〈アラズ〉は人が生み出した怠惰たいだじゃの。

——ひとしきり喋ったメイは、

驚いた赤い獣の顔を覗き込んで笑っている。

人間の傷口は消毒しなければ、魂が荒れる。

屠体とも放血しなければ、同じことが起こる。

(どうして屠体とが失ったはずの魂が荒れるのか?)

牡鹿を屠ほぶった時の疑問の答え。

キツネのメイは、魂の存在を否定した。
すなわち〈アラズ〉そのものの否定だった。

(〈アラズ〉など、魂など存在しない…。)

赤い獣の抱いた疑問は、

メイの言葉で容易く解決してしまった。

蛇は〈アラズ〉に手を与えられ、

人となって大地に肉体を縛られた。

しかし肉体を縛っていたはずの〈アラズ〉が、

魂さえもが存在しないものであれば、

それは赤い獣にとって人が生み出した

言葉による足枷かせに過ぎなかった。

(なんてことだ…。)

メイの言葉によつて、

赤い獣を縛っていた足枷かせは解かれた。

—それにお主はのう…。

—いきなりわしの胸を揉んだケダモノじゃ。

—おかしな理の、ハレンチなヤツじゃ。

好き勝手を言ったあとで、

メイは前足を折り曲げて鼻先を近づけた。

——お主、何か忘れとらんか？

(まさか…)

血と唾液が喉を塞ぎ、

その塊を口の端から吐き出して首だけ頷いた。

呼吸が浅く、弱々しくなる。

(知ってたのか…)

ぼやける視界と、震える手で

メイの腹下にある山刀をまさぐる。

——こそばいでないか。

手のひらに収まる薄い板を取り出した。

シカのツノから削り出した横長の櫛。

豎櫛たてくしに比べ短い櫛だが、

多めの歯を削り出すのに何本か折れた。

不出来な横長の櫛を見せるのを躊躇ためらい、

山刀の鞘に入れ隠して持ち歩いた。

それをメイの額に当て、

ゆつくりと撫でて抱き寄せた。

メイは目を閉じて、満足気な顔をした。

暖かな吐息を顔に感じる。

体温を胸に感じる。

寢床で顔を足蹴にされた日々を思い出す。

(ああ、良かった……)

それからヨエルも目を閉じた。

—— 恩には恩じや。

—— お主が獣として生きるもよし。

—— 人として死ぬもまたよし。

—— さあ、選択の時じや。迷い子よ。

1 2 ふたつの境界

月明かりの中、

黒い影が草を掻き分けて歩く。

赤い獣の逃げた血の跡を追う

〈正統聖教〉の名もなき信徒。

キルスの父、ヨエルの『ご主人』であった

フィン家当主のハンヌが先頭を歩いた。

ハンヌにはもはや人の名はなかった。

黒い頭巾に髪は覆われ、

鼻と口を黒い布で隠す。

露出した鋭い目は血走り、

翠眼は瞳孔が開いて暗い。

彼は娘を殴り殺し、吊し上げた。

彼は息子さえも見捨てた。

彼の魂は、妻を失った時に荒れた。

農家や町の人々に裏切られ、荒れた。

魂の荒れた彼は娘に見放された。

娘は彼を〈新生聖教〉の保養所へと入れたが、

対立する〈正統聖教〉は北西部にある

彼の館を得るべく圧力をかけた。

それに屈した保養所は彼を売り渡した。

そして、〈正統聖教〉は彼に『治療』を施した。

しかしそれは治療ではなく、

〈アラズ〉の威光を借りた

暴行と聖薬による薬漬けであった。

繰り返し行われた治療により、

彼はオスとしての部位を奪われ、

人としての部位を壊された。

大量に与えられた聖薬によつて、

繰り人形として荒れた魂さえも失った。

その人形の前に現れたのが、かつて哀れに思い、

餌付けしまった小さな赤い獣であった。

月明かりに照らされる赤い頭髮に、

割られた胸を赤くして、大きな人形の前に立つ。

「穢れた〈ナルキア族〉を殺せ。」

人形は小男に命じられ、

赤い獣に向かい走る。

赤い獣の足元に、輝く銀毛のキツネ。

「あわれな『ご主人』だ。」

赤い獣の発した言葉に、

人形は動きを止めた。

小男の命令が寸断された。

「何をしてる!」

人形はそれ以上、動けなくなつた。

操り人形の糸は焼き切れ、身体は熱を発した。

「異端者です! 〈煤まみれ〉の残り滓かすです!」

小男は焦っていた。

焼いたはずの〈ナルキア族〉が、

斬つたはずの〈ナルキア族〉が、

まだ目の前に立っていることに。

そして人形が動かなくなつたことに

苛立ちを覚え、赤黒い顔をさらに濃く染めた。

焦りだす小男の言葉に、

他の十余の信徒が2匹の獣を取り囲んだ。

みな両刃の剣を携えて、

いつでも斬り殺せるように構えている。

「^{すす}煤まみれか。」

赤い獣の言葉で、

かつてハンヌ・フィンという名であつた男は、

その人形は、激しい炎に包まれて燃えた。

まばゆい光を放ち、

筋肉を覆う皮膚は弾け

破裂音を立てて内部を焼いた。

顔と頭を覆つた布は灰になり、

金髪が、翠眼が、皮膚が燃えて蒸気を放ち、

人形の真つ黒な炭へと姿を変えた。

名もなき信徒たちは、

〈^{すす}煤まみれ〉を突如目の当たりにした。

赤い獣と目を合わせた

名もなき信徒がひとり、

死の恐怖に駆られると

腰を抜かして這いずり逃げた。

その隣の者も、ほかの者たちも、

次は自分の番ではないかと、

名もなき信徒たちは理解を超えた恐怖が伝播し、

〈ナルキア族〉の村から逃げ出した。

最後に残ったのは小男であった。

2匹の獣に睨まれて、

配下を全員失ったことで、

本物の〈^{すす}煤まみれ〉を見たことで、

小男は恐れをなして逃げた。

〈^{すす}煤まみれ〉の生き残りが

胸を切られても生き延びて、

ひとりの名もなき信徒を

本物の〈煤すすまみれ〉にした。

得体の知れない恐怖に駆られ、

理解できないものを、

信じがたい光景から

目を背けるために逃げた。

しかし小男は逃げた先で、

足を穴に引つ掛けて転んだ。

夜暗と草木に隠れてたくくり罨が、

小男の足を捕らえた。

——お主が仕掛けた雑な罨じゃ。

「野犬を村に近づけんようにした罨だ。」

——どんくさい人間も居ったもんじゃの。

罨にかかった獲物を探して

森林を見回るキツネが言うので、

妙におかしくて赤い獣は鼻で笑った。

鼻にはもう腫れも血の詰まりも無い。

小男は倒れたままこちらを向き、

慌てて剣を抜くと再び赤い獣を斬った。

剣は赤い獣の腕肉を削いだ。

腕からは赤い血が流れる。

腕を切られても平然とするその獣に、

小男は跪ひざまずいて剣を手放し、

右の拳を左の肩に置いた。

「頼む！ 私も〈煤すすまみれ〉に…、

その力で私も焼いていただきたい！」

小男は言った。

突然のことに2匹の獣は顔を見合わせた。

「私は〈正統聖教団〉の名もなき信徒。

北部異端審問官のジヨウシヤだ。

〈ミダス〉の力で、この名を残してくれ！」

小男は〈南部港キアン〉訛りの名を名乗った。

〈禁域〉に住まう島の所有者〈ミダス〉は

争い合う人間に怒り、町を焼き払う。

「すす煤まみれ」は「ミダス」の力と呼ばれた。

——こやつに信念は無いんかのう。

キツネは疑った。

キツネの言葉は小男には聞こえていない。

「「ミダス」の力、なんてないもんはない。」

赤い獣は血が流れる左腕をぶら下げ、

右の手で削がれた腕肉ごと触れて撫でる。

血は止まり、傷跡だけが腕に残った。

小男はその光景を信じられず、

自分の目を疑い両手で拭った。

「すべては理だ。」

——わかつて来たではないか。お主。

キツネの胸の傷を思い出して

赤い獣はそれを真似ただけであつた。

「死んで土に還る。ただそれだけのこと。

それを「アラズ」と呼んだに過ぎん。」

赤い獣にはそれがようやく分かつた。

銀毛の獣がそれを教えてくれた。

「お前は私を殺すのではなかったのですか。」

私はこの村を焼いたんです。

この村の人間を斬って全員殺したんです。」

小男は引きつった笑みを浮かべて告白を続ける。

「歯向かう異端者を斬り、

女を斬って犯して焼いた。

子どもを刺し、老人を刺し、殺し、

赤子を投げて焼いた。

お前の家族を殺し、犯し、焼いたのです。」

立ち上がり、見下ろす小男。

「獣同然の〈ナルキア族〉の村は、

〈正統聖教〉に必要無かった。

戒律を歪める連中に〈煤まみれ〉^{すす}は丁度良い。

だから獣どもは〈アラズ〉に裁かれた。

〈太陽神クサン〉が罰を与えたのです。

ただそれだけの為に死んでいただきました。

ああ、それは愉快でした。

穢れた連中が焼かれ、

綺麗になるのですから。

我々が新たな神話を作るのですから。」

「人が人を殺しただけだ。

獣が獣を殺すのと何が違う。

〈アラズ〉はそれを罰せない。」

「違う！

私は罰して欲しい。

魂になり、聖人になり、

神々にたどり着きたいのです。

わかってくれ！ 私はお前の同胞だ！

〈煤まみれ〉の残り滓かすが生き残った。

これはまさに僥倖ぜいこうだ！ 神の奇跡だ！

お前が私を殺さないのであれば共に生きよう！

お前の：私達の力を、〈中央〉の連中に

知らしめてやるのです！」

(わからん……。何を喚いてるんだ、こいつ……。)

飽き飽きとさせられる小男の叫びの最中、キツネが口を挟んだ。

——ほら、お主。どんくさいヤツが来た。

——お主の血の臭いで釣られたんじやな。

——卵泥棒のどんくさオオカミめ。

キツネの向く方を赤い獣が見た。

小男も訴えを止め、視線を向けた。

森林で畏にかかった土色の若いオオカミ。

キツネのキジを盗んだ因縁深いオオカミ。

(メイのじゃないだろ……。)

執念深いキツネに、赤い獣は閉口する。

「待て！ 助けてくれ！」

「それは〈アラズ〉に祈れ。」

「私に〈煤^{すす}まみれ〉を！」

「運^{うん}が良かったな。後ろ足だ。」

小男は慌てて拾った剣を振り回した。

若いオオカミは剣を躲かわして飛び退いたが、横から大きな銀毛のオオカミが飛びかかった。

瞬時に喉を噛み砕く。

大きなオオカミは顎あごとその力強さで、

小男の身体を振り回し牙を食い込ませる。

小男は剣を力なく落とすと、

胸元に付けた金色の紐飾りは外れ、彼の

頭巾から赤い髪の毛があらわになった。

「あが……」

赤黒い顔を剥き出しにした小男は、

〈ナルキア族〉の口減らしであった。

口から血の泡を吐き涙して、赤い獣を見た。

——こやつは悪食めじや。

キツネがオオカミたちを誘そしった。

赤い獣は〈アラズ〉の祝詞のりとを唱えない。

屠体とを黙とって見つめた。

2匹のオオカミは

4匹の子どもを連れて屠肉をむさぼる。

名もなき信徒は、やがて土へと還る。

森林を歩く道すがら、

切られた腕の傷を見て

ヨエルはメイに尋ねた。

「メイはどうして怪我したんだ？」

初めて会ったあの森で、

メイは弱り、腹に傷を負っていた。

——わしはへミダスの理から生まれた

——ただのキツネじやからの。

——人に襲われ斬られることもあるわ。

「…どんくさいやつだ。」

——わしをどんくさと一緒にするでない。

「メイはどんくさオオカミに鳥を取られた

どんくさキツネだからな。」

——なんじゃ！ なんじゃ！

——好き勝手言いおつて！

メイが抗議してヨエルの足をぐるぐると回った。メイは〈禁域〉のキツネ。

島の所有者〈ミダス〉の住む〈禁域〉で生まれ、島の理の中で生きる。

——のたれ死んだるお主がよう言えたもんじや。

「おしゃべりなヤツじやのう。まつたく…。」

ヨエルは顎あごを指で撫でてメイの真似をした。

「いつそんな古い喋り方を覚えただか…。」

——お主の言葉が古臭いからじや。

「オレか？」

——そうじや！ お主じや！

——お主の言葉がわしに移った。

——へんな訛りが身についたもんじや。

「オレはそんな喋り方せんぞ。」

——それじや！ それじや！

——はあ…これじやから男子はのう。

キツネに向かい、言葉をかけたヨエル。

最初の呼びかけが、メイの名前となった。

——どんくさいお主のせいじゃな。

——どんくさいから世話が焼ける。

どんくさいとヨエルが言ったせいで、
どんくさいとメイに何度も言われる。

「何とでも言ってくれ。」

メイの小言にヨエルははにかんだ。

——それでお主は人か、獣か？

名前と言葉を貰ったキツネは、

死にゆく赤い獣に命の選択を与えた。

死の間際、ヨエルは考えた。

人の姿をした獣が居た。

人の言葉を話す獣が居た。

「言葉を話すおしゃべりなキツネが

人の隣に居るんだ。

猟をして、料理をする獣が

キツネの隣に居ても不思議じゃない。」

——なんじゃあそれは…。

返ってきた答えにメイは呆れた声で言った。

メイはヨエルの隣を歩く。

ヨエルはメイの隣を歩く。

(自分が一体なんなのかなんて…。)

それは今もヨエルには分かかっていない。

ただひとつ、ヨエルにとって、

メイを残してしまうことだけが心残りだった。

(恩には恩を…。)

それだけがヨエルの生きる理だった。

(人も獣も同じなのだから。)

尻尾を振ってメイが前に走ると、

向き直って後ろ足をよたりと倒して座った。

ヨエルはメイの目線に合わせてひざまずく。

——ほれ。

鼻先を上げるメイが目を閉じた。

それを合図にヨエルは櫛を取り出した。

額を梳き、背中を梳いた。

撫でられた銀の毛が揃い、

月明かりに光りきらめく。

「やっぱりノミは居らんのだな。」

——お主い…。

——お主はそういうところがダメじゃな。

——アホウで、臆病者で、泣き虫の迷い子の…、

——甲斐性なしでハレンチなケダモノじゃ。

先を歩くヨエルに付いて離れず、

メイは足元でくるくると回って飛び跳ねた。

ヨエルはそれを目で追った。

「はらへったな。」

——それはわしが言おうとしたりした。

メイが笑ったので、ヨエルも笑った。

「メイ。」

——なんじゃ、ヨエル。

「何が食べたい。」

——鳥じやな。

「はははっ。鳥かあ。」

メイのいつもの要求に、

ヨエルは久しぶりに声を出して笑った。

森林を超えるとそこは深き森の禁猟区。

等間隔の柱が並ぶ、

人を通さぬ島の〈禁域〉。

白色の柱の間を抜ける。

ふたりは並んで境界へと入った。

(了)